

カンボジア共産党ナンバー・ツー, ヌオン・チア (Nuon Chea) のバンコク時代 (1942年-1950年)

村嶋英治[†]

Young Nuon Chea in Bangkok (1942-1950): Experiences Prior to Becoming Khmer Rouge Brother No. 2

Eiji Murashima

Nuon Chea was the second most powerful man in the Communist Party of Kampuchea, ranked after Pol Pot, known as "Brother Number Two". Upholding the extreme Marxist ideology, the Party is notorious for sponsoring Cambodia's massacre during 1975-79 when it was in power. Before he advanced his political career in the Communist Party of Kampuchea, Nuon Chea received secondary and higher education in Thailand in the 1940s and joined the Communist Party of Thailand (CPT) in 1950. In fact, the early experience of Nuon Chea in Bangkok is little known to historians.

On 12 August 2003 the author conducted an interview with Nuon Chea in Pailin; after that, he extended his research on young Nuon Chea's career in Bangkok through meeting his CPT comrades in Bangkok and collecting his academic records in high school and university. Based on the interview researches and other documents sources, this paper attempts to present young Nuon Chea's life in Bangkok.

Nuon Chea was born on 7 July 1926 in Battambang under French rule, the area was transferred to Thailand in 1941 and its resident held Thai nationality up to 1946. Nuon Chea, took a name Runglert Laodi, advanced his career in Bangkok. Residing at a Buddhist temple Wat Benjamabopit, he studied at Wat Benjamabopit High School (1942-1943) and Thammasat University in its two-year preparatory course (1944-45, 7th graduating class) and its regular course (1946-1950), which he left before its completion. He enrolled as a law student at Thammasat University on 1st May 1946. Recruited by Ruam Wongphan (b.1922-d.1962, Thammasat student and CPT's member at that time), Runglert Laodi (Nuon Chea) started his political career in leftwing Democratic Youth movement in 1947. At the same time, he was employed by the Ministry of Finance as a clerkish class public officer in around early 1948. In October 1948, he passed examinations of the all required subjects for the first year of Thammasat. In January 1950, he passed 7 subjects among 8 required subjects for the second year. If he had continued his study one more year, it was quite likely for him to graduate from Thammasat University. In 1950, Udom Charoenrat (b.1929-d.2007), a Thammasat student and Nuon Chea's colleague in the Ministry of Finance at that time, introduced Nuon Chea to join CPT. Nuon Chea's CPT cell was composed of only three members; Udom was its head. Shortly after entering CPT, Nuon Chea passed the employment examination of clerkish position of the Ministry of Foreign Affairs (According to the Civil Servant Act, the clerkish position was the only possible position for those who have not graduated from universities). In the late 1950, he abruptly abandoned his law study at Thammasat University and his promising position in the Ministry of Foreign Affairs in order to join the anti-French struggle in Cambodia, his homeland.

Nuon Chea's life in Bangkok was not different from Thai students coming from outside Bangkok.

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授, Professor, Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University

Nuon Chea was in fact one of the first generation of highly educated Thai members in CPT; previously, most of the CPT members were Chinese or Chinese descendents educated at Chinese primary or secondary schools in Bangkok.

はじめに

2007年9月19日の朝日新聞ウェブ版は次のように報じた。「70年代のカンボジアで国民の大虐殺に関与した波尔・ポト政権の元幹部らを裁く特別法廷の係官らが19日、同国西部パイリンにあるヌオン・チア元人民代表議会議長の自宅に入った。同日中にも身柄を拘束し、プノンペン近郊の同法廷に移すとみられる。元議長は故波尔・ポト元首相の側近として政権運営を担った最高幹部の1人。79年の政権崩壊と内戦を経て、98年に投降。同派の拠点地域だったタイ国境に近いパイリンで暮らしていた。昨年7月に設置された特別法廷では、今年7月に検察官が元幹部ら5人の本格捜査を捜査判事に要請。すでにカン・ケク・イウ元収容所長が取り調べを受けており、残る3人の身柄も近く拘束されるとみられる。」

9月19日に逮捕監禁されたヌオン・チアは、翌年2008年2月4日に国連の支援をうけたジェノサイドを裁く特別法廷に初めて姿を現し、保釈を求めた。BBCのサイトは、同2月7日この保釈請求を報じて、ヌオン・チアを“Experts believe Nuon Chea was the ideological driving force behind the regime and responsible for its most radical policies.”と評し、2008年後半に裁判が開始されるであろうと報じた。

ヌオン・チアは1960年代からカンボジア共産党副書記長であり、“Brother Number Two”と称され、同党トップリーダーの波尔・ポト (Pol Pot pseudonym for Saloth Sar, 1925–1998) に次ぐ地位にあった。1975年4月17日、同党の軍隊はプノンペンを占領し、国名を民主カンボジア Democratic Kampuchea (DK) と改名したが、ヌオン・チアは民主カンボジアの国会議長を務め、また1976年9–10月に、波尔・ポトが首相を辞任した際に、首相代理を務めた。1978年暮れベトナム軍がカンボジアに進攻して以後も、波尔・ポトと行を共にした。1998年4月に波尔・ポトが死亡した。ヌオン・チアは、キュー・サンバン (Khieu Samphan, 民主カンボジア時代の国家元首) とともに、同年12月25日に、プノンペンのフンセン首相に、普通の市民として生活したいという投降の書簡を出し、フンセンもこれを歓迎した。以後パイリンのタイ国境で生活してきた。

カンボジア共産党及び同党が支配した民主カンボジア政府で重要な役割をになったヌオン・チアが、バンコクで中等・高等教育を受け、タイの国家公務員にも採用されたこと、バンコクでタイ共産党の党員になったことは、カンボジア現代史の研究者には比較的良好に知られていることである。しかし、バンコク時代のヌオン・チアの正確かつ詳細な実像に迫った研究は未だ存在しない。例えば、カンボジア近現代史の研究者として著名な David P. Chandler は、その著書の中でヌオン・チアについて次のように紹介している。

Nuon Chea was a Sino-Khmer from Battambang, born into a prosperous family in 1927. His

カンボジア共産党ナンバー・ツー、ヌオン・チア (Nuon Chea) のバンコク時代 (1942 年-1950 年)

name at birth was Lau Ben Kon. During World War II, when Battambang was under Thai control, he went to Bangkok, where he completed his secondary schooling under the name Long Ruot. In 1945 he enrolled as a law student at Thammasat University, also in Bangkok, where he earned an academic scholarship. He soon became a member of the Communist party of Thailand without informing his family. He was probably inspired to do so by his cousin Sieu Heng, who had also spent part of the war in Bangkok and had joined the Indochina Communist party in Battambang in 1945.¹

また、カンボジアの共産主義についての詳細な研究で知られる Ben Kiernan は、次のように述べている。

Around the same time [in 1945], Long Reth, a Khmer law student at Thammasat University in Bangkok, working part-time as a clerk in the Ministry of Foreign Affairs, was recruited by Muon and joined the Communist Party of Thailand. He moved back to Battambang and soon transferred to the ICP. (In 1960, under the name Nuon Chea, he became deputy secretary of the Communist Party of Kampuchea.)²

上記の両者のヌオン・チアについての短い記述でも、彼の生年、タマサート大学入学年、タイで使用した氏名、職歴、タイ共産党に参加した経緯などについて、正確さを欠いている。

2001 年 6 月 4 日に Australian Broadcasting Corporation (Radio Australia) は “Cambodian genocide investigators call for Thai held documents” と題した次の報道を行っている。

Cambodian genocide researchers are asking a prestigious Thai university to hand over the records of a senior Khmer Rouge leader who studied there, saying they may contain vital evidence for any UN-sponsored trial. Documentation Centre of Cambodia director Youk Chhang, has written a letter urging Thammasat University to hand over the records of Nuon Chea, the shadowy “Brother Number Two” to dictator Pol Pot.

It says officials of the United Nations says the University archives will be the key source of evidence for the tribunals. Investigators are keenly interested in Nuon Chea, who was Deputy Secretary of the Communist Party of Kampuchea and Deputy Prime Minister of Democratic Kampuchea. Nuon Chea attended law school at Thammasat University on an academic scholarship in the 1940s and later worked for a time in the Thai foreign ministry, he now lives in Pailin in the northwest of the country where he has been since the Khmer Rouge resistance ended³.

しかし、これにタマサート大学が答えた形跡はない。たとえタマサート大学が答えたくとも、ヌオン・チャがバンコク時代に使用した姓名が判らない限り、何万人もいる登録学生の中から同定することは不可能であろう。しかも、後述するように、2001年の時点では、ヌオン・チャのバンコク時代に彼と行動を共にした老齢の元タイ共産党員たちさえも、かつてのクメール人の党員がボル・ポト派ナンバー・ツーのヌオン・チャであることを知っている者は一人もいなかった。2003年9月以降に、筆者がこれらの元タイ共産党員たちに会って、ヌオン・チャ自身の口からかつての同志として彼らの名前を聞いたことを伝えたので、彼らは1950年にタイ共産党からインドシナ共産党に転籍しカンボジアに帰った人物（ルンロート・ラオディー）がその後ヌオン・チャと名乗ったことを認識した。この結果、ルンロート・ラオディー＝ヌオン・チャという認識は、少数の元共産党員間には共有されるようになったであろうが、今日に至るまで彼らはバンコク時代のヌオン・チャについて一般に公表することはしていない。これは2008年7月20日現在、タイ語のウェブ上で検索すると、ヌオン・チャのタイ名、ルンロート・ラオディー（**รุ่งเลิศ เหล่าดี**, Runglert Laodi⁴) がタイ文字では一つもヒットがないことから推測される。

ところが、同じ時にローマ字の Runglert Laodi で検索して見ると、長年カンボジア取材を重ねてきたバンコク・ポストのタイ人女性記者 Nusara Thaitawat が、ヌオン・チャにインタビューし2006年4月18日の Bangkok Post 紙上に書いた記事がヒットした。また、彼女はその前日、即ち同年4月17日付けで、Documentation Center of Cambodia の HP⁵ にヌオン・チャの略歴を書いている。この両者の内容は、当然のことではあるが、筆者らがヌオン・チャから聞いた内容と重なる部分がある。しかも、ヌオン・チャは我々には明かさなかったバンコク時代の名を彼女には教えている。すなわち、上記 HP には、ヌオン・チャが1944年にタマサート大学（正しくはタマサート大学予科―筆者）に入学し Runglert Laodi というタイ名を使用したことが書かれているのである。一見、筆者の調査研究の成果発表は先を越されたように見えるが、良く読むと彼女はヌオン・チャが話したことをそのまま記しただけで、他の文献や一次資料に当たって検証することも、ヌオン・チャとバンコクで活動を共にした人物を捜し出してヌオン・チャの談話と比較検討することもしていない。また、彼女は、この時代のタイ政治史について十分な知識がなく、当時の公務員の採用に関する法律制度についても無知であるため、事実誤認や無理な解釈を下している。その結果、彼女が記したヌオン・チャのバンコク時代の経歴や行動は、事実とは相当にかけ離れた内容となってしまう⁶。

2003年8月12日、筆者はカンボジア・タイ国境のパイリンに未だ自由の身であったヌオン・チャを訪ね、タイ語で3時間20分のインタビューを実施した。その話のなかで彼は、自分がバンコク時代に使用していた姓名は秘して明かさなかったが、卒業した中学はワット・ベンチャマボピット (Wat Benjamabopit) 校（同校の現在の校名は、マタヨム・ベンチャマボピット学校）であること、タマサート大学予科7期生 (7th graduating class of preparatory course for Thammasat University) であることを明かにした。また、タイ共産党で同一細胞に属した人を含む5名ほどの共産党員の名も挙げた。

これらの情報に基づき、筆者はまずヌオン・チャのバンコク時代の氏名がルンロート・ラオディー

(Runglert Laodi, รุ่งเลิศ เหล่าดี) であることを探り当て、彼が在学もしくは在職したマタヨム・ベンチャマボピット学校、タマサート大学、タイ外務省に、この名の人物の記録があることを確認した。同時に、ヌオン・チアがインタビューの中で名を挙げた元タイ共産党員など数名に面会し聞き取り調査を実施した⁷。

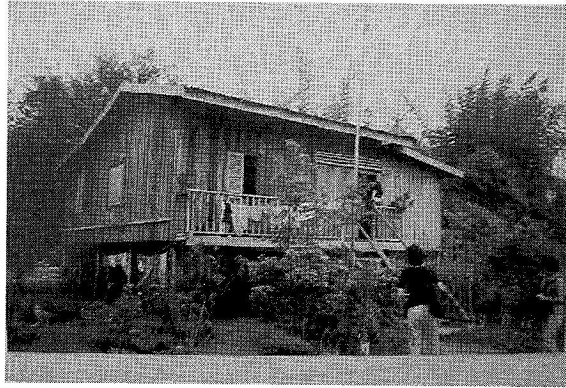
本稿は上記の調査によって得た資料に基づき、青年ヌオン・チアが 1950 年にカンボジアに出発するまでのバンコクでの生活、政治活動をできるだけ詳細に跡づけることを試みる。本稿の成果は、単にヌオン・チアの伝記の最も不明な部分を明かにするだけではない。彼が、バンコクで活動した 1940 年代後半の時代は、タイにおける共産主義運動が既存の華入党員やベトナム入党員の枠を越えて、タイ人知識人の中に初めて拡大していった時代にあたる。ヌオン・チアも、この潮流の中でタイ共産党の運動に参加した知識人の一人であった。タイ共産党に関する既存研究においてヌオン・チアのタイ名が全く出てこないことにも示されているように、この時期のタイ共産党の研究は極めて手薄である。本稿はタイ共産党にタイ人知識人が入党するようになった、戦後初期のタイ共産党の活動を明かにする面においても一定の貢献があるものと考えている。

1. パイリンのヌオン・チア

筆者らは、2003 年 8 月 12 日、朝 7 時 30 分バタンバン (Battambang) のホテルから借り上げた車で西南西方向のパイリン (Pailin) に向け出発した⁸。町を出てパイリンに向かう道に入る。無舗装の道だが、固い赤土なので雨が降っても車の通行には支障はない。路上ですれ違う自動車は殆どない。二頭の牛が引く牛車を、何台か追い越した。タイでは既に消滅した牛車が、ここでは未だ運搬用の現役として活躍している。道路の両側には平地の水田地帯が広がっている。平原の中に所々に低い岩山が点在している。

車で行くこと 1 時間半ほどでパイリンへの入り口、Welcome to Pailin City とクメール語・英語で書かれた標識が道路脇に立つ場所に達した。しかし、周囲は一面の畑で、City を思わせるものは何もない。バタンバンからパイリンの入り口までは平地だったが、パイリンに入ると少し高くなる。しかし、山脈は遠くに見える程度で、大部分は起伏ある丘陵地帯である。入り口の標識から行くこと 40 分にして、やっと丘陵の上にあるパイリン市街に到着する。市街地には、市場や小さなホテルもあり、タイで言えば比較的大きな郡庁所在地の景観である。この地はかつて宝石採掘の中心地として栄え、ビルマ人やシャン人（クラーと言われる）なども出稼ぎに来て賑わっていた。今日でもシャン人が建立した二つのビルマ式寺院が小高い丘の上に残っている。しかし、ヌオン・チアの所在地は、ここではない。この市街地から西北西方向に更に車で 20 分ほど、メイズやゴマを栽培する畑作丘陵地帯を走り、カジノのあるタイ国境まで行かなければならない。この辺りの丘陵の森林が失われたのは最近のようで、未だ焼けこげた丸太が畑の中に転がっている。

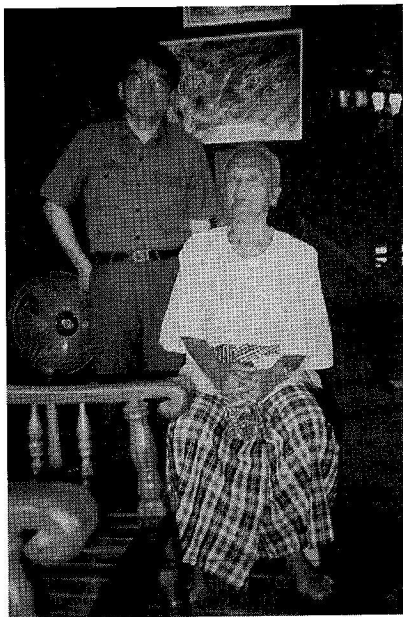
体育館風のカジノ (Caesar International Casino) の前に到着したのは 10 時過ぎであった。このカジノはタイ側からカンボジア側に入ったばかりの所に建てられており、タイ側から多数のタイ人の庶民が軽装でトランプ賭博に集まっている。カジノの入り口の前道には 10 軒ほどの土産物屋が並んでいる。



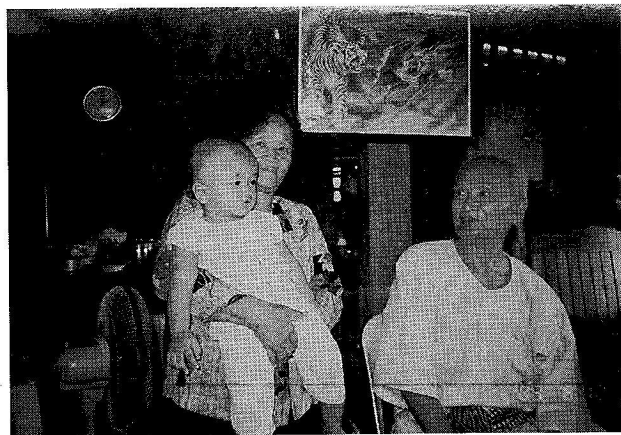
ヌオン・チアのバイリンの自宅（2003年8月12日）

ここでヌオン・チア宅に再度電話をして到着を告げた。ここから500メートルほど引き返し、地雷注意！の大きな絵入り看板がある場所で右折して小道に入った。両脇にバンブーの茂みが点在する小径を行くこと数分、右手に2軒の高床式の家が現れた。最初の家がキュウ・サンパンの家で、100メートルほど離れた奥がヌオン・チアの家であった。ヌオン・チアの家は木造、トタン屋根の高床造りで、居間の外に2寝室程度の普通サイズの住宅であり、入り口階段横にはテレビ用の高いアンテナ柱が立っている。回りに警備や護衛者の気配は全くない。のどかで変哲もない農村の伝統式家屋である。キュウ・サンパンもヌオン・チアも行動の自由を有しているようで、前者はしばしばプノンペンとの間を往復し、我々が訪問した際もプノンペン滞在中のため不在であった。ヌオン・チアは妻、子供夫婦と同居定住している。彼の子供夫婦はメイズやゴマの畑作に従事しており、畑作地は、イエンサリ (Ieng Sary, 民主カンボジア時代の副首相兼外相) の息子から借りているという。この息子は現在のバイリンの有力者である。

ヌオン・チア宅に上がると、彼は妻と1歳ほどの孫と一緒にあった。ヌオン・チアとの連絡の一切および道中の案内を担当してくれた早稲田大学アジア太平洋研究科修士2年（当時）のカンボジア人留学生 Ourn Pheakiny さんが、カンボジア語で訪問者を紹介した。Pheakiny さんを含め訪問者4人全員が、タイ語あるいはラーオ語を解するため、そののちはタイ語で会話した。ヌオン・チアのタイ語は、タイ人のタイ語と何ぞ変わらない。バンコクで中等・高等教育を受け、タマサート大学時代には3年以上タイの国家公務員として働いていたのであるから当然かも知れないが、それは半世紀以上も前のことである。ヌオン・チアが自ら語ったところでは、1950年にカンボジアで闘争に入った後は、タイ共産党との連絡も途絶え、タイ語を使用する機会は極めて限られていた。それでもタイ語を忘れなかったのは、タイ語の本を読み、タイ語放送をきいているからだと言う。バイリンのこの地に移ってからは、年に数回タイ領内のチャンタブリー (Chanthaburi) の医院に心臓病、脳梗塞などの加療のため通院し、その都度タイ語の仏教関係の書物を買って来て読んでいるという。その例として、彼はブッタタート (Buddha-dasa Bhikkhu), パユットー (P. A. Payutto Bhikkhu), パンヤー・ナンタ (Panyananda Bhikkhu) というタイで著名な僧侶の著作を寝室から取り出して見せてくれた。居間にはタイ・サンガの大僧正プラ



筆者とヌオン・チア (2003 年 8 月 12 日)



ヌオン・チア夫妻と孫 (2003 年 8 月 12 日)

ヤーナサンウォン師 (Supreme Patriarch Somdej Pra Yana Sangvorn) の写真も飾られている⁹。ヌオン・チアはフランス語に堪能なようで、インタビューでも時々フランス語の単語を使った。

ヌオン・チアとのインタビューの 6 日後にプノンペンで会った、前出の Youk Chhang (Documentation Center of Cambodia) 氏は、ヌオン・チアはクメール人のインタビューには警戒から身構えて、心を許さないが、一方、外国人には、時によっては詳しく話しをすることもある、なかでも、タイ語で質問すると感情を込めて詳しくしゃべる、という噂だと語ったが、我々のインタビューでは、ヌオン・チアは確かによくしゃべってくれた。これはタイ語の御蔭かもしれない。

2. ヌオン・チアの談話

ヌオン・チアは自分の出生を次のように語った。1926 年 7 月 7 日にバットバン郊外のワット・コー近くで生まれた。父は商売やトウモロコシの畑作の外にも、様々なビジネスを手がけていた。母は裁縫の仕事などもしていた。自分は 7 歳から就学したので子供のころ農業をした経験はない。バットバンではフランス語とタイ語も学んだ。タイ語はクメール人には容易に修得できる言語である。家庭の経済事情は、第一次大戦以前は大変良かったようだが、大戦以後はそれほど良くはなかった。母の父は潮州から来た華僑であった。自分の父の姓は、ラオ (Lao)¹⁰ で、父は旧正月や清明節には中国式に先祖を拝んでいた。しかし、自分は、中国語は全く判らない。自分の妻は、カンボンチャナン (Kampong Chhnang) 州の華人系だが純粹の農民出身である。彼女との間に 4 人の子供、10 数人の孫がいる。(バットバン地域はタイ仏印紛争の結果、日本の調停で 1941 年にタイ領に復帰したが、一筆者) 1942 年にバットバンで中学 4 年を修了し、バンコクに出た。バンコクに行くとき、自分は独立国とはどんなも

のかに漠然とした関心があった¹¹。しかし来てみると、バンコクには中国人が多いのに驚いた。タイの商業は中国人が殆ど牛耳っており、タイ人で商売に従事する者は少なかった。当時ベンチャマボピット寺には、バットンバン出身のクメール人僧侶が3名いたので、彼等の世話になった。同寺の僧坊に住み込み、ベンチャマボピット学校の中学5年に通うことになった。中学6年を終えて、1944年にタマサート大学予科¹²に7期生として入学した。ヌオン・チアという名はカンボジアでの闘争時代に使用するようになったもので、タイでは別の姓名を使用していたが、それは公開できない。タマサート大学予科に進学しても同大総長のプリーディー・パノムヨン (Pridi Phanomyong) と会話をするような機会はなかった。自分は年少で、ただの学生の一人に過ぎなかったから。戦中に自由タイ運動に参加したことはない。

戦争が終わる前の1944年(ママ)(下線筆者)に「タイ青年会」(Ongkarn Yawachon Thai)に参加した。この組織に加わったのは、華僑学校の校長をしていたルアム・ウォンパン (Ruam Wongphan, 1922.4.1-1962.4.24) に誘われたからである。ルアムとは一緒に部屋を借りて生活したこともある。ルアムが共産主義活動の罪で、バンコクで(1962年4月24日に一筆者)死刑に処されたことは、プノンペン(ソ連大使館の広報誌で知ったが、大変残念である。この組織には、ルアムの他に華人系の女性ニット・ボンダーブペット¹³ (Nit Phongdapphet 1927-2000) やサノ・パーニットチャローン (Sanoh Phanitcharoen 1927年5月生)、プラサート・サップスントン (Prasoet Sapsunthon 1913-1994) の妹ラムチアック (Lamchiak Songkharak 1926年7月生) らが参加していた。また、この活動の関係でローン・メークパイブーン (Roeng Mekphaibul) にも会った。サノは小柄な身体だったが、中国に長く留まっているようだ。彼らとは、5月1日のメーデーにも参加した記憶がある。

タイ共産党の機関誌『マハーチョン』(Mahachon)¹⁴ が公然と出版されていた時代には、同誌を好んで読み、同誌の編集部を訪問してウドム・シースワン (Udom Sisuwan 1921-1993)¹⁵ など共産党の理論家と反仏闘争などについて議論したことがある。当初は同誌が共産党であることも知らなかった。ウドム・シースワンが書いた『タイの出口』¹⁶ (Thang Ook Khong Thai, 1950年4月刊) や、タイ語訳の『共産党宣言』¹⁷ (Kamnotkan Khommiunist, 1946年12月刊)、プラサート・サップスントン著『人生観』¹⁸ (Chiwathat, 1949年9月刊) を読んだ。『人生観』の内容には当時から批判があった¹⁹。タイ共産党の機関誌『マハーチョン』の外に、進歩的な新聞『シアンタイ』(Siang Thai) も読んだ。

自分が在タイ時のクメール・イサラク (Khmer Issarak) 運動は、いくつかのグループに分かれている上に、未だ正しい政策をもっていなかった。多くは運動に名を藉りて私利を図る団体であった。タイで名を知られていたクメール・イサラク指導者 Poc Khun には、バンコクであったことがあるが、Poc Khun も私利追求の類であった²⁰。タイ領内のスリン (Surin) 県やブリラム (Buriram) 県に住むクメール系住民は、クメール民族意識に乏しい。自分が直接ベトナムで会った、ベトナム領内のクメール人は心からクメール人としての意識を持っていた。バンコクのクメール人は少人数なうえ、タイ語を話している。

自分の母の妹の夫である、カンボジア南部出身の Sieu Heng は、東北タイのスリン県でクメール・イサラクの活動をしており、時々バンコクにも出て来ていた。彼はその後ベトナム共産党と協力したが、しかし、Sieu Heng が私をインドシナ共産党に紹介したのではない。自分を紹介したのはあるベトナム

人だ。その人はバンコクで活動していた Tran Van Giau 教授でもない。

バンコクでは大蔵省中央会計局 (The Comptroller General's Department, この局は、各政府機関およびその出先である県の各機関に対する国家予算の出納、それらの支出の監査を主な業務としている一筆者) に就職し 3 年間働いた。同省には正規の公務員として採用されていた。朝タマサート大学で講義を聴いたのち、大蔵省の職場に出勤する生活であった。ここで 1950 年にタイ共産党に入党し、正式に党员になった。党员になる前に 6 カ月間の候補期間があった。また、入党前は青年会で 4 年間活動した。入党後所属した細胞 (小組、タイ語ではヌアイ) は公務員の細胞で、大蔵省会計局に勤務する 3 名から構成されていた。3 人の内、一人はウドム・チャローンラットであった。もう一人の名は思い出せない。タイ共産党の中にいたクメール人は自分一人だけであったと思う。大蔵省在勤中の 1950 年に外務省の採用試験があったので受験し合格した。外務省に移ったのは、大蔵省の仕事は数字ばかりを相手とし将来性がないと考えたからである。また、外交官になりたかったからでもある。しかし、外務省で働いたのは 1 ヶ月程度に過ぎず、退職直後カンボジアの反仏戦争のために帰国した。外務省では、インドシナ、ビルマを担当する部署に配属された。ここでラオスのフランス軍が、ラーオ人を弾圧しているという報告を読んだ記憶がある。タイ共産党员としてアメリカの朝鮮侵略 (朝鮮戦争の勃発は、1950 年 6 月 25 日一筆者) に反対した。

ベトナムの党とタイ共産党の上層部の話し合いで、自分のインドシナ共産党への党籍の変更が行われた。しかし自分の共産党歴はタイ共産党入党の時から計算されている。インドシナ共産党に移って後、パイリンのサムロート (Samlot) 地区に入り、反仏闘争のために村々で宣伝・訓練を担当した。しかし、この時は未だ上層部には属さず、下部での活動であった。スターリンが死亡した年 (スターリンは 1953 年 3 月 5 日死亡一筆者) に、パイリンからタイ・カンボジア国境の町、アランヤプラテート (Aranya-prathet) まで徒歩で行き、タイ人の振りをして、アランヤプラテートから国鉄でバンコクに入った。更にノンカーイ (Nong Khai) に行き、ここでメコン河を渡った。ラーオ・イサラ (Lao Issara) の人々の案内で、徒歩や自転車でラオス内を通過し、ベトナムの Hoa Binh に向かった。Hoa Binh では、ベトナム人教官から、自分を含むクメール人 10 人ほどが 2 年間訓練を受けた。ベトナム語が判らない人には通訳が付いていた。この地で、ラオスのスパヌウォン (Prince Souphanouvong)、シンガポール (Singapo Sikhoudchounlamany)、カイソン (Kaison Phomvihan) らに会った。しかし、タイ人に会うことはなかった。1955 年にプノンペン (Phnom Penh) に帰国した。フランスとの戦争が終わったのちのことで、この 1955 年にプノンペンでボル・ポト (Pol Pot) に初めて会った。1960 年に共産党の副書記長に選出され、一貫してこの地位にあった。党内序列は、ボル・ポトに次ぎ二番目であった。どんな党でも、たとえ僧侶の世界でも対立はある。自分とボル・ポトとの間にも小さな対立は存在した。しかし、大きな対立、特に政策面での対立は存在したことはなかった。ボル・ポトは共産主義者としてのモラルが高い人物だった。他人のものには手を付けないし、酒も飲まない。国を守るためには軍勢力は必要であるし、自衛は権利だ。自衛のためには、時には人を殺すことは、已むを得ない義務である。自分が闘争のためジャングルに入ったのは 1970 年のことだ。

1950 年にタイを出国して以後、タイ共産党との連絡は全くなくなり、タイ人と会うことも極めて稀

であった。記憶にあるのは1975年か1976年に自分が国会議長時代に、プノンペンを訪問したタイ共産党のプルワン・ワンナシー (Pluang Wannasri, 1922-1996 タマサート大学予科5期生一筆者) と、党書記長の肩書きだったと記憶しているがチャート (Chat) という偽名を使う色白の人物に会ったことくらいだ。

毛沢東の本を読んだのは、反仏闘争が終わったのちで、プノンペンで購入したベトナム語訳を読んだ。自分はクメール、ベトナム、タイ、ラーオ語を読むことができる。

国外に行った経験は、反仏闘争時代に中国を経てモスクワの平和大会に参加したこと、民主カンボジア時代には、国会議長として中国、ベトナム、北朝鮮を訪問したことくらいだ。

(筆者等が、民主カンボジア時代のジェノサイドについて質問したのに対して) もし民主カンボジアが人民を殺していたら、どうして革命に勝利できたであろうか、また、建てたばかりの自分の家を自ら焼くような人がどこにいるだろうか。我々上層部の政策を下層部で誤解した者がいたかもしれないが、上層部は現場まで下りていって見る余裕がなかったので現場で生じていることを知らなかった。長時間労働と食料不足のために多数の人が死亡したことを防ぐことができなかった責任は我々にある。クメール・ルージュ (ヌオン・チア自らタイ語でクメール・リュージュを意味する Khmer Daeng と表現した) の指導者は、善良な人間であり、盗賊や悪人の類ではない。知識も高い。ポル・ポトは、中国の周恩来と同様にフランスに留学した知識人である。自分たちが権力をもっていた時のことについて、外部の人間があれこれ批評するが、これはあくまで外の人間の批判だ。日本は自然環境に恵まれていないのに、どうして発展することができたのか。それは精神的な覚醒 (tuntua) のためではないか。最も重要なのは思想 (thatsana)、意志 (nukkhith) である。日本が大国になることができたのは、思想 (thatsana) と意志 (nukkhith) があり、自らの力で実践したからではないか。私が意図したことは、カンボジアでも思想と意志を高め、自らの力で実践することなのだ。人間の性格を変えることができるかどうかは、その人の属する階級が最も重要である。最もよい階級は農民階級であり、彼らは最も信頼できる。一方、知識人は指導 (nam) しないとダメだ。

民主カンボジア時代に宗教を禁じたことはない。自分の両親も仏教徒であり、自分も仏教徒だ。自分は現在特に禅に関心を持っている。子供の頃、バットンバンで火葬をみたとき、出家したいと思ったことがある。バンコクのベンチャマボピット寺に住んでいた頃は、毎週一回、僧侶の説教を聞いた。タマサート大学に入学後も、大学で学び続けるか、あるいは一生出家しようかという考えの間で、気持ちが揺れた。大学で学ぶのは何故か。タイ共産党の機関誌『マハーチョン』を読みながら、支配階級や資本家に仕えたくはないと思った。仏教と共産主義は類似のものが多い。ただ、仏教は非暴力 (不害: アヒンサー) であるのに対し、共産主義は暴力を行使する点が異なる。仏教を儀式として理解してはいけない。仏教徒も共産主義者も、怒 (Dosa, 瞋恚) や無知 (Moha, 愚癡) など仏教でいうところの三毒を抑制しなければならない点では同じだ。仏教の説く善行は共産主義者のモラルとも合致する。人民の信仰は、迷信等を除き、共産党は尊重しなければならない。クメール・ルージュが支配した時代にも、憲法上に信仰の自由はあった。決して宗教を禁じたことはない。信仰するかしないかを選択する権利は存在したのだ。勿論、民主カンボジア時代は、宗教よりも建設が重視されたことは事実だが、極左ある

いはアメリカやベトナムの手先であるスパイどもが、人民を害するために宗教を破壊したのだ。現在自分はブッタートの本を読んでいるが、その本で説明するところの縁起説などは、マルクスの理論を知らないと理解するのは難しいであろう。現在自分は体が不自由で寺院に行くことはできないが、妻はしばしば寺院に参っており、今朝も行ってきたところだ。

外国人が自分について書いたものは、不公平で偏見に満ちている。例えば、Chandler (冒頭に引用した研究者—筆者) は、自分を訪ねてきたこともないが、間違っただけを多数書いている。ジャーナリストで私にきちんとインタビューした者は、Nate Thayer (インタビュー時 Far Eastern Economic Review の記者—筆者) くらいだ。自分はまとまった書物を書いたことはない。また、今後も自分のことを書くつもりはない。私の伝記は人民に書いてもらいたいのだ。

3. ヌオン・チアのタイ名はルンロート・ラオディー (Runglert Laodi)

プノンペンからバンコクに戻った筆者が先ずやるべきことは、ヌオン・チアから得た情報をもとに、彼がバンコクで使用した氏名を探り出すことである。バンコク時代の彼の名前が判らなければ、彼が名を挙げた元タイ共産党員のタイ人たちに会っても話しの糸口がつかめない。それに筆者は、これまでの元タイ共産党員たちとのインタビューの経験から、共産党との関わりについて積極的に話す元共産党員は少ないことを知っている。1930 年代後半から 40 年代のタイ人による共産主義運動草創期において最も重要な役割を担ったウィロート・アムパイ (Wirot Amphai, 中国名、黄君玉) のように、何回電話をしてもけんもほろろで、会ってさえくれない人もいる。それ故、ヌオン・チアがタイで使った氏名を特定することが先決である。

まず、ヌオン・チアが所属したタマサート大学予科 7 期生名簿を手に入れ、それらしき名前がないかどうかを見ることにした。ヌオン・チアも語ったようにタマサート大学予科 7 期生は、1944 年前半に入学し 1946 年前半まで 2 年間在学している。手に入れた 7 期生名簿²¹には、1439 名の名があった。この数に漏れがあるかどうかは判らないが、七期生の総数は大体この程度であったのだろう。思ったよりも多い数である。名簿にはタイ語のアルファベット順に氏名が並んでいる。最初から見始めて、半ばを過ぎた辺りに、ルンロート・ラオディー (Runglert Laodi, รุ่งเลิศ เหล่าดี) という名に出くわした。直感的に、これがヌオン・チアではないかと推定した。その根拠の一つは、本稿冒頭に引用したように、バンコク時代のヌオン・チアの名を David P. Chandler は Long Ruot と、また Ben Kiernan は Long Reth と書いていることだ。これは Runglert に近い。もう一つの根拠は、Laodi というファミリーネームである。ヌオン・チアは父の姓は Lao であったと筆者らに語った。Lao は中国人の姓で、漢字で書けば「劉」であろう。華人系タイ人は、タイ式のファミリーネームを作る際に、中国の姓の発音をその一部に取り込むことが多い。姓の Lao に良いという意味の di をプラスした Laodi (「良き Lao」) もそのような華人風のファミリーネームの作りになっている。

Runglert Laodi がヌオン・チアだと見当をつけて、次に、この名前が、彼が学んだというベンチャマボピット学校の卒業生リストにあるかどうかを調べた。

ベンチャマボピット寺は、チュラーロンコーン王が建造した由緒ある寺で、チットラダー宮殿や首相

府に隣接したバンコクの中心部にある。マープル（大理石）寺院という別名で知られバンコクの有名な観光スポットとなっている。大理石で造られたウィハーンにはスコータイ仏が鎮座し、回廊には世界中から奉納された多数の仏像が安置されている。後方には多数の僧坊が連なり、その隣にベンチャマボピット学校がある。ヌオン・チアは、この僧坊に止住するバットンバン出身の僧侶の世話になり、この僧坊に居住してワット・ベンチャマボピット学校に通学した。このような居住通学形態はヌオン・チアに限ったことでなく、今日に至るまで地方出身のタイ人青年男子がバンコクの学校に進学する場合には多く見られることである。本稿で取り上げるタイ人共産党員、プラサート・サップスントン、ルアム・ウォンパン、サノ・パーニットチャローン、ソムクワン・ピチャイクンらも地方から出てきてバンコクの寺院に住み込んで上級学校に学んでいる。

筆者は、2003年9月3日にベンチャマボピット学校の教員室を訪問した。卒業生名簿は総てパソコンに入力されており、簡単に検索できるという。早速、ルンロート・ラオディーを調べてもらう。確かにこの名前はあった。学籍番号は4467番、1942年度に中学4年(Mo.So.4)修了、1943年度には中学5年(Mo.So.5)を卒業して、タマサート大予科に進学したと記録されている。1943年度卒とは1944年前半の卒業であるから、タマサート大予科7期生の入学時と符号する。一つ疑問が残るのは、通常中学6年を卒業して大学予科に進学するのだが、彼の場合は中学5年で卒業し、大学予科に進学していることである。単純な入力ミスか、あるいは戦争中の特殊事情で繰り上げ卒業になったのだろうか、理由は卒業生名簿を検索してくれた教員にも判らなかった。

これでルンロート・ラオディーがヌオン・チアであることはほぼ確実となった。あとは、ヌオン・チアが名を挙げた人物たちが、ルンロートと共に活動したことを認め、その活動内容がヌオン・チアの話した内容と符合すれば万全である。そこでヌオン・チアが、大蔵省中央会計局の同僚であり3人でタイ共産党の末端組織（細胞）を構成していた一人であると明言したウドム・チャローンラットと連絡を取った。

調査時期は前後するが、タイ外務省所蔵の古い『外務省公務員リスト』(Batraichu kharachakan Ko. To.)にルンロート・ラオディーの氏名があることを確認したことを先に書いておきたい。2004年8月に外務省の知人に連絡して、この氏名の確認を依頼した。結果は、ルンロート・ラオディーという氏名があり、「外務省に仏暦2493年入省、退職」という簡単な記録が付されているという。ルンロートが仏暦2493年即ち西暦1950年に入省したことは確実だが、入省月日や所属役職などは記載されていない。退職した年月日の記載もないが、調べてくれた外務省員の話しでは、1950年に入省と記載された行の直ぐ下の行に退職とだけ書かれているから、同じく1950年に退職したと推測されるという。そうだとすれば、1950年に外務省に入省し、一ヶ月程度で退職したというヌオン・チアの談話と全く一致している。また、彼が3年間在職したという大蔵省にも、職員リスト中に彼の名が残っているかどうかを尋ねた。しかし大蔵省は、1986年以降の退職者の記録しか保存していないという回答であった。それ故、ルンロート・ラオディーが、1940年代後半に大蔵省に在職したかどうかは大蔵省の保管資料からは判らなかった。

4. ウドム・チャローンラット (Udom Charoenrat, 1929-2007) との面会

2003 年 10 月、プラチュアアップ・アムパサウェート (Prachuap Amphasawet, 1919 年生 タマサート大学予科 2 期生) からウドムの電話番号を聞き、ウドムに連絡した。プラチュアアップは戦後初期のタマサート大学における代表的学生指導者であり、勇敢かつ断固として戦う指導ぶりによって、活動仲間の信望が高い。2000 年には『回天』(Phlik Phaendin) というタイ現代政治史の大著を出版した奇特な老政治家である。(2003 年 10 月には同書の続編も出版した)

ウドムに電話して、プラチュアアップから紹介されたこと、8 月にカンボジアでルンロート に会ったら、ウドムの名前を覚えていたことを告げ、ルンロートの写真も撮って来たから是非会って話を聞きたいと頼んだ。ウドムは、ルンロートという名に直ちに反応した。「ルンロートは未だ生きていたのか、随分前に落馬して死亡したと聞いていたのだが」、と。結局、彼が信頼するプラチュアアップ²²と一緒に、会ってもよいと面会を承諾してくれた。

2003 年 10 月 22 日の昼間、国会に近いのでタイの政治家がよく利用するホテルの一つ、Thai Hotel で 3 時間に亘って、ウドム、プラチュアアップ両氏に面談した。――

初対面の筆者にウドムは、比較的良好にしゃべってくれたが、留保した点も少なくない。これは初対面のインタビューでは当然のことで、多数のタイ人政治家にインタビューしてきた筆者が、しばしば経験したことである。正確かつ詳細な情報を得ようとすれば何回も会って信頼されるようにならなければならない。ウドム、プラチュアアップの両氏が Pailin まで筆者のアレンジで旧同志ルンロートに会いに行きたいと希望したこともあって、その打合せを理由として 2005 年 3 月半ばまで、ウドムと何回も電話で話す機会を得た。2003 年 12 月にプノンペンを再訪した際には、同所から Pailin のヌオン・チアに電話して、ウドム、プラチュアアップ両氏の訪問について諒解も得た。しかし、近い親戚の中には外交官として出世した者もいるというウドムは、老いて耳が遠くなってもなおタイ現代史の究明に関心が強いプラチュアアップほどには、ヌオン・チア訪問には熱心ではなかった。訪問の話はいつの間にか立ち消えとなってしまう、ウドムも 2007 年に他界した。

ヌオン・チアがバンコクで活動を共にしたと名を挙げたタイ人のうち、筆者が最初にインタビューしたのは、ウドムである。彼との話からヒントを得て、次にインタビューすべき相手を捜したのだ。しかし、ヌオン・チアが、ウドムと大蔵省で職場を共にし、ウドムを紹介者としてタイ共産党に入党したのは、在タイ期間中の最末期である。本稿では、叙述が時間的に逆転して理解が困難になることを避けるため、筆者のインタビューの順序ではなく、ヌオン・チアがタイで知り合い活動を共にした時期が古い人物から先に取り上げることとする。

5. ルアム・ウォンパンと「タイ青年会」運動

ヌオン・チアは筆者との面談で、ルアム・ウォンパン (Ruam Wongphan, 1922.4.1-1962.4.24) に誘われ、1944 年 (下線筆者) に「タイ青年会」(Ongkarn Yawachon Thai) に参加したこと、その際ルアムとは一緒に生活したことがあること、また、ルアムが共産主義活動の罪で、バンコクで死刑にされたことを知っていると述べた。「タイ青年会」活動は、ヌオン・チアの政治経歴の出発点となった活動であ

り、ヌオン・チア理解のためにはこの団体の実態をできるだけ明らかにする必要がある。

ヌオン・チアが青年会活動に参加した年は、1944年で間違いないだろうか、1944年時にこのような団体が存在したことに懐疑的な筆者はヌオン・チアとの面談時にも3回も聞き返したが、彼は戦争が終わる前のことで1944年であったと同じ答を繰り返した。果して、ヌオン・チアがいう1944年に活動に参加したという話は、記憶違いではなく事実であろうか。筆者の高齢者たちとのインタビューの経験では、どんなに記憶のよい人でも半世紀以上前の話では、たとえそれが本人にとって重要な事柄であっても数年のずれがあることは珍しくない。ヌオン・チアは、筆者との面談で1950年に共産党に入党する前に4年間青年会活動をしたとも述べている。もし1944年に青年運動に参加したとすると数が合わない。そもそもこの青年会はいつ、だれが創立したのであるか。ヌオン・チアをこの団体に誘ったルアムとはどんな人物なのであるか。以下、これらの点を検討したい。

ルアムは1962年4月24日に独裁者サリットの命令により、裁判の機会を与えられることもなく「国外の外国人から指令を受けて国王を元首とする民主主義体制を転覆し共産主義体制に変えようとした」²³容疑で銃殺刑に処されたので、彼とインタビューするすべはない。しかし、文献資料や関係者の話を基にして彼の経歴をある程度正確に明かにすることは可能である。

ルアムはスパンブリー県 BangPlama 郡 Tambol Makhamlom の農家の長男²⁴として1922年4月1日に生れた。某中学に学んだ後、1941年度に中学の最後の学年(6年生)の1年間のみを、名門スワンクラブ校に学んだ。彼と同時期に転入して同様に最後の一年だけで在学して卒業した者には、1961年から死亡する1979年までタイ共産党総書記の地位にあったチャローン・ワンガーム(Charoen Wangam, 1925-1979)、スティー・ナートウォラタット(Suthi Natworathat, 1927年生、商業省外国貿易局長、ターニン内閣商務大臣)がいる。また、当時3年制(中学4,5,6年)のスワンクラブ校に中学4年生から在学し、転入後のルアムたちと同学年になった者に、元首相ターニン・クライウィチアン(Thanin Kraiwichian, 1927年生)や共産党元中央委員のサムクワン・ピチャイクン(Somkhwan Phichaikul, 1926年9月生)がいる²⁵。彼らは1941年度、即ち1942年前半にスワンクラブ校を卒業した。バンコクの富裕層の子弟が多いスワンクラブ校で、地方出身の貧乏学生であったルアムは同一境遇のサムクワンやチャローンと親しく付き合ったようである。

当時大学に入るには中等教育6年を出たのち、2年間の大学予科を卒業するか、同等の教育を受けることが必要要件であった。1941年度すなわち、1942年前半に中等教育6年を終了したルアムは大学予科に入らず、バンコクのWang Buraphaにあったプラ・ナコン商業学校に進学し、2年間(1942/43, 1943/44の二学年)学んで、大学入学資格を得て、1944年7月19日²⁶にタマサート大学に入学登録した。学生登録番号は、17857番。届出住所は、タマサート大学と河を挟んで反対側にあるバンコクノイ運河に入って直ぐ左手にあるワット・アマリントララーム寺第9僧坊である²⁷。

ルアムは1944年5月末だ商業学校に在学中に、チュラーロンコーン大学の新聞学夜間コースを受講している。新聞学夜間コースには友人のチャローン・ワンガームの外にウィロート・アムパイ²⁸などタイ共産党のメンバーも通っており、ここで共産党との接点ができたものと思われる。

タイ共産党の労働指導者で、党内有力者の一人であったダムリ・ルアンスタム(Damri Ru-

カンボジア共産党ナンバー・ツー、ヌオン・チア (Nuon Chea) のバンコク時代 (1942 年-1950 年)

angsutham 1923 年 6 月生、中国名は呉維實) は筆者に次のように語った。即ち、ウィロートの系統 (サーイ) は、知識人即ち党機関誌『マハーチョン』のサーイである。ルアムの入党は、ウィロートの系列が行った、ルアムは戦後、啓光学校 (1946 年 6 月に海南人の瓊崖同郷会が創立し²⁹、左翼の符開先が校長―筆者) が開学すると、同校のタイ語校長に就任し、この校長時代に共産党員に入党した³⁰、と。

後述するラムチアックも、ルアムが入党したのは、戦後のことであり、彼女の兄のプラサート・サップスントンの入党 (プラサートが共産党入党を公表したのは 1946 年 12 月 6 日である³¹―筆者) より少し前だと語った。また、死亡するまでタイ共産党の実質最有力者と言われたウィラット・アンカターウォン (Wirat Angkathawon 1921-1997、張遠の名で知られる) の妻パーブン (Pa Phung) は、ルアムは戦争中ではなく、戦後になって間もなくタマサート大学の共産党系の学生運動を指導したと筆者に語った³²。

ルアムの妻は彼の処刑後長らく火葬に付さなかった。彼女はようやく 1995 年 4 月 23 日になって火葬したが、その際、出版した葬礼記念本は、彼の略歴を「ルアム同志は、第二次大戦が終息後、革命運動に参加した。『マハーチョン』誌の時代には学習会を組織する運動に加わった。「タイ青年協会」(Samakhom Yawachon haeng Prathet Thai) 時代にはファシズム独裁に抵抗する運動に参加した。タマサート大学学生の最も初期の運動に参加した」³³、と記している。

以上より、ルアムは戦争末期にタイ共産党のウィロートらと接触があったことは推測されるが、革命活動に参加したのは第二次大戦戦後であり、共産党に入党したのは、1946 年半ば頃であることが判る。彼が入党するに当っては、共産党機関誌『マハーチョン』に同誌所有者と記載されているウィロート・アムパイの外に、同誌で記者をしていたスワンクラブ校の同級生チャローン・ワンガームも関係しているであろう³⁴。

次に、「タイ青年協会」とは何であろうか。

これは共産党系の共青团でないことは確実である。タイ共産党系の共青团に相当する、So. Yo. To. (タイ国青年連盟) が成立したのは、1949 年末 1950 年初である³⁵。これ以前は、本稿で後述するように共産党員の青年グループが存在してはいたが、これは既に入党した青年の非公式グループであり、入党以前の青年団体ではない。So. Yo. To. 成立以前は「共青团」的団体は存在していなかったので、入党者も当然「共青团」を経ることなく直接共産党に入党していた³⁶。

サノ・パーニットチャローンは、共産党の指令により、1947 年 4 月 10 日 (正しくは 4 月 7 日―筆者) に王宮前広場 (サナム・ルアン) でタイ青年グループ (Klum Yawachon Thai) という名で、軍事独裁復帰のための軍事クーデター計画に反対するに集会を開いたと書いている³⁷。共産党機関紙『マハーチョン』1947 年 4 月 13 日号の報道によればこの集会の主席はローン・メークパイブーン (Roeng Mekphaibul) で、サノは進行係であった。この記事にはルアムの名は見出せない。また、サノは筆者とのインタビューでは、更に詳しく次のように述べた。

1947 年 4 月 10 日 (ママ) に反軍事クーデターの集会を開催した。この集会の後に「タイ青年会」(Ongkarn Yawachon Thai) が組織された。この団体の長はルアム・ウォンパンであった。この団体は公然面で活動した。この団体内の共産党員は当初は、ルアム、サノ、ローン・メークパイブーンの 3 人

のみであった。ローンは、ルアム、サノより少し後に入党した元陸軍下士官 (Sip to) で、サノより8歳年長で酒飲みであった。その後、ソムクワン、ニコン (入党後間もなく活動を止めた)、労働運動指導者ワート・スントンジャーモン (Wat Sunthonchamon, 1892-1954) の娘ガンダーらに加わり、多いときには党員は10人くらいになった。ルンロートはフランス語がよくできたので、自分はルンロートを連れて青年会関係の外国人に会いにいったことがある。

サノのいう、ルアムを長とする「タイ青年会」(Ongkarn Yawachon Thai) が実在し、公然と活動したことは、1947年9月1日当時の Bangkok Post 紙の次の記事から裏付けを得ることができる。即ち、「Siamese Youth Organization が主催して、昨日サーラナロム公園で開催した公開演説会で、何人かの弁士 (全員が国会下院議員一筆者) が、(1946年11月17日のタイ仏紛争処理協定により一筆者) タイがフランスに失ったインドシナ領土に関して、国連へ訴えるか、もしくはフランスとの交渉によって再返還を求めるべきだと述べた。この演説会ではタマサート大学学生ルアム・ウォンパンが司会をし、次の開催主旨を説明した。…」³⁸『マハーチョン』1947年9月7日号もこの集会を報じルアムをタイ青年会主席 (Prathan Ongkarn Yawachon Thai) と紹介している。

また、後述するソムクワン・ピチャイクンは筆者に次のように語った。

ロンドンでソ連系の青年団体 the World Federation of Democratic Youth の大会が開催された際、(多分1945年11月10日に開催された創立大会のこと一筆者) イギリス滞在中のチュラーロンコーン大学教師サノ・タンブンユーン (Sanoh Tambunyun) がタイの青年代表として参加した。彼は帰国後 (タイへ帰国のためイギリスを離れたのは1947年4月14日一筆者)、タイでも Democratic Youth 運動を企画した。1947年11月クーデターの前に、イギリス人がバンコクに来て、バンコクの国立博物館 (正しくは国立博物館隣の芸術局国立劇場一筆者) を会場として、ラオス、カンボジア、ベトナム、マラヤからの青年代表をも集めた国際民主青年大会を開催した。何人ものチュラーロンコーン大学の先生たちが、教え子を率いて参加し、タマサートの学生も多数参加した。開会式にはティアン・シリカン (Tiang Sirikhan) 大臣が来て挨拶した。この会議の後に、タイでも「タイ青年会」が発足した。本来は「民主青年会」とすべきだが、「民主」の語は刺激的なので捨て、「青年」(Youth) だけを使ったのだ。この Youth 運動に、ルアムもソムクワンも参加した。スワンクラップの同期生であったスティーも、参加するに至った経緯は知らないが参加していた。スティーはその後アメリカに留学し、入党はしなかった。ルンロートも Youth で活動していたかも知れないが、その時には、自分と付き合いはなかった。タイ共産党への入党者が増加するのは、1947年11月クーデターの後のことなので、それ以前の Youth 運動では共産党の影響力は限られていた。

ソムクワンのいう国際民主青年大会が開催されたのは1947年9月14日である。『マハーチョン』1947年9月21日号及び『全民報』1947年9月15日号の報道では7カ国の青年が参加し、青年が団結して世界の平和と民主を維持することと各民族の独立運動を支持することを呼びかけた。ルアムはタイ青年会代表として主席団主席を務めた。

以上より、ルアムの葬式本にいう「タイ青年協会」とは、サノやソムクワンのいう「タイ青年会」と同一であることが判る。ヌオン・チアが 1944 年にルアムに誘われて参加したというタイ青年会とは、実はイギリスでソ連系の World Federation of Democratic Youth 運動に参加したサノ・タンブン・ユーンが、1947 年 4 月以降に、タイに帰国後タイでも結成するように提唱し、ルアム・ウォンパンやサノ・パーニットチャローン、ソムクワン・ピチャイクンら共産党員も参加して組織された青年団体のことであると考えて間違いない。この団体は国際的には Democratic Youth と称されたが、タイではただ Youth と称されたようだ。

ヌオン・チアがタイ青年会運動に参加した年は、1944 年はないと考える根拠は次の通りである。①ヌオン・チアにタイ青年会参加を勧誘したのはルアムであるが、ルアムが共産党に入党したのは 46 年半ばである。44 年時点ではルアムは未だ政治運動を開始しておらず、ヌオン・チアを誘うこともあり得ないこと。②ヌオン・チアはタイ青年会運動で活動を共にした人として、ルアムの外にサノ、ラムチャックらの名を挙げたが、後述するように彼らは活動に参加したのは 1947 年初以降だと証言していること、③ルアムを長とするタイ青年会の成立は 1947 年半ば前後であること、④ヌオン・チアがタマサート大学予科に進学したのは 1944 年前半、ルアムがタマサート大学に登録したのは、1944 年 7 月であるが、予科と大学本科とは別物なので、多数の予科生、大学生が存在するなかで、両人が知り合う機会が存在したとは考えられないこと、⑤ヌオン・チアは 1950 年に共産党に入党するまで、4 年間タイ青年会で活動したと述べているが、もし仮に 44 年から青年会に属していたのであれば、50 年まで足かけ 7 年属していたことになり、数が合わないが、47 年から計算すると 50 年まで丁度 4 年であること。

その後のルアムを簡単に見ておくと、彼はタイ共産党の最初の中国共産党への研修派遣員の一人として、1949 年 5 月に中国に発った。出発時点まで啓光公学のタイ人校長をしており、同校の女教師と結婚して 2 カ月に過ぎなかった。同校タイ人校長は後述するように親友で共産党員のソムクワンが引き継いだ。タイに戻ったのは、1957 年。中国では雲南省のタイ族地区、西双版纳で農民工作活動に従事した。帰国後中国での農民工作の経験を生かして郷里のspanブリーで農民工作を開始した。1961 年の共産党第三回大会では政治局員に選出された。1962 年 2 月 22 日spanブリーで警察に追われ翌日逮捕された³⁹。4 月 24 日サリット首相が自らルアムを一時間尋問したが、ルアムは秘密を漏らさずサリットを怒らせた。この日の 18 時にバーンクワーン監獄で銃殺刑に処された。軍事独裁者サリットの不当な弾圧は共産党に武闘の準備を急がせることとなった⁴⁰。

6. サノ・パーニットチャローンの回想

ヌオン・チアが名前を挙げた元共産党員、サノ・パーニットチャローン (Sanoh Phanitcharoen, 1927 年 5 月生) には、Fa Diowkan 誌編集者 Thanaphol Yiwsakul 氏の紹介で、タマサート大学にて 2005 年 3 月 26 日の昼間に 3 時間半ほど面談することができた。サノは中部タイのアユタヤ県 Bang Ban 郡出身で 1927 年 5 月に生まれた。父方祖父は海南島から移民して来た華僑で、父はタイ生れの華人 (瓊人) で、一方、母の父はアユタヤのペルシャ系の住民で、母の母の先祖はウィエンチャン出身で

あるラーオ人であった。しかしサノの両親は全くタイ式の生活をしていて、サノは6人兄弟姉妹の末っ子で、長兄がバンコクの名門寺ワット・ボーウォーンニウェートで出家していたので、長兄の僧坊に居住し、小学校4年から中学6年までを同寺の付属学校で学んだ。卒業後タマサート大学予科に6期生⁴¹（ヌオン・チアより一年前の期で1943年度入学、1944年度卒業—筆者）として入学した。1944年7月末にピブーン内閣が総辞職したが、その後ピブーンを批判する論文を日刊紙スワナブーム紙に投稿したことが契機となり、同紙で働くようになった。1946年後半イサラタム紙のチャローン・チャイチャナ（Charoen Chaichana, 1907-1983）編集長から英文の共産党宣言を借りてタイ語訳し、同紙上に連載したのち、一冊の書物として刊行した。1946年の大晦日の日にウドム・シースワンから入党を勧誘され、3カ月の候補期間ののち入党した。入党の際の紹介者は、ウドム・シースワンとウィロート・アムパイの二人であった。（当時戦後の国内政治の混乱から、軍事クーデターの噂が飛び交い、またピブーンが政界復帰の意思を公表したので—筆者）、共産党員の青年たちは、1947年4月10日（正しくは、4月7日⁴²—筆者）に反軍事クーデターの集会を開催した。この集会の後に「タイ青年会」（Ongkarn Yawachon Thai, 通称 Youth）が組織された。この団体の長はルアム・ウォンパンであった。この団体は公然面で活動した。この団体内の共産党員は当初は、ルアム、サノ、ローン・メークパイブーンの3人のみであった。後には前述のように10人くらいになった。ルンロート（ヌオン・チア）は、フランス語がよくできるので、自分はルンロートを連れて Youth 関係の外国人に会いにいったことがある。

ソムクワンはルアムと大変親しかった。当時ルアムはタマサート大学から河を渡って直ぐの場所にあるワット・ウィセートカーン寺近くに住んでいた。1947-48年当時の共産党の青年組織の中心は、ルアムとサノであり、この組織は『シャムの声』というガリ版刷りの新聞を出していた。この新聞をソムクワンやルンロートが配布していた。ルンロートと最も親しかったのは、ソムクワンだったのに、ソムクワンはルンロートの入党に関わらず、その後入党したウドム・チャローンラットがルンロートの入党紹介人になったことは不思議である。1947年11月の軍事クーデターの後、自分はウドム・シースワンを通じてウィラット・アンカターウォンの紹介で華僑学校である南洋中学に就職した。1951年11月24日にバンコクを発って中国に行き、1993年11月9日に初めてバンコクに戻って来た。連続して42年間も中国にいたことになる。自分は中国行きを希望していたわけではなかったが、47年11月軍事クーデターに対する党上層の対応をだらしないと批判したことが上層部の耳に入って彼らの信頼を失った。彼らは私を邪魔者扱いし、口封じのために中国に追い払ったのだ⁴³。

ヌオン・チアがサノのことをよく記憶しているのと同様に、サノもルンロート（ヌオン・チア）のことを良く記憶していた。1947年当時、ルンロートは、未だ共産党員ではないが、共産党系の団体であった Youth の共産党員たちと付き合い、Youth の活動に参加していた。ヌオン・チアは、筆者へのインタビューで入党する前に4年間タイ青年会の活動をしていたと語ったが、それは正にこの Youth での活動のことであると考えて間違いない。

7. プラサートとラムチアックの証言

ヌオン・チアが名前を挙げたもう一人の人物、ラムチアック・ソンカラック（Lamchiak Songkha-

rak 1926年7月生)を2003年12月21日に、バンコクのラートプラオ区セーナーニコムの自宅に訪問した。彼女はプラサート・サップスントンの実妹である。ヌオン・チアはプラサートの著作『人生観』を読んだと語っているので、まず、プラサートについて、筆者が1981年に彼にインタビュー (Interview with Prasert Sapsunthon at Bangkok on 16 June 1981) した古い記録などをもとに簡単に紹介したておきたい。1980-82年当時、バンコクで調査研究に従事していた筆者は、プラサートがロイヤルホテルで毎月開く「民主軍人グループ」の定期講演会に出席したのみならず、ラーマ6世通りのソーイ・サーサナーの自宅にも何度か訪問して、教えを乞うたことがある。彼は、筆者にとって尊敬に値する数少ないタイ政治の師の一人であった。

プラサートは南タイのスラタニー県の地方支配層の出身。南タイ出身者が多く世話になっているバンコク、サムセン通りのワット・ラーチャティワート寺 (ラーマ4世王が即位前に出家していた寺院として名高い) の僧坊に住み、1933年半ばにチュラーロンコーン大学文理学部 (現文学部) に入学し、1937年初めに文学士の学位を得て卒業した。同大学文理学部は仏暦2478年度 (1935/36) 卒業生から学士号を出すことになり、プラサートは文学士第三期生である。彼はタイ社会で大卒が極めて珍しかった時代のエリートである。彼は大学でローン・サヤマーノン (Rong Syamananda) 講師の下で歴史学を専攻した。この時代の大学学部案内 (Prospectus)⁴⁴を見ると、教科書や参考図書は英語であり、相当の英語力を身に付けたと思われる。これが、戦後共産党員になって自らマルクス主義文献を英語で読み、知識を増大させることができた理由だと思われる。彼は大学2,3年生時の1934-36年に、チュラーロンコーン大学学生クラブ (全学生が会員) の雑誌『マハーウィタヤーライ』 (Mahawityalai, 大学の意) の編集長として、著名知識人多数に執筆を依頼して、意欲的な編集を行った。例えば、1934年12月発行予定の号について「本号のマハーウィタヤーライほど多数の執筆者を集められる雑誌、本誌に比肩できる雑誌は他にない」 (『Mahawityalai』 Vol. 12, No. 5, Nov. 1934 表紙裏) と広告している。プラサート自身も、同誌にいくつかの詩を載せている。かれはその後も詩人として『エーカチョン』などの雑誌の常連であった。タマサート大学を創立したブリーディー・パノムヨンに対抗して、チュラー大の学生を政治基盤にしようとしてピブーンが、チュラー大に援助を与えて接近してきたことから、プラサートはピブーンと接点ができた。戦中にピブーン派文化人が出版した『文学報』 (Wannakhadisan) でも常連寄稿者となっている。大学4年生の仏暦2479年 (1936/37) 度はチュラーロンコーン大学学生クラブの会長 (前年の2478年度の会長は文理学部理系のサノ・タンブンユーンで、彼は前述の通り1947年にイギリスから Democratic Youth 運動をタイに持ち帰った人物である)。プラサートは1937年初めに卒業後、同年11月7日に行われたタイ政治史上最初の直接選挙にスラタニーから立候補したが、次点で落選した。その後、他の文理学部の卒業生たちの多くと同様に中等学校の教員として就職した。彼が就職したのは、スワンクラブ校である。同校の歴史地理の教師として、ルアムやソムクワンの世代を教えた。彼は1938年11月12日の総選挙にも立候補したが落選。この後ピブーン政権は戦争を理由に総選挙を延期し、次の総選挙は46年1月6日まで実施されなかった。この3回目の選挙で彼は初当選することができた。当選時は無所属であったが、民主党の創立に加わった。しかし、反共法廃止を提案するために民主党を脱党。反共法廃止を提案した動機は、特別なものではなく、民主主義体制の下では

反共法はあるべきではないという考えと、議員として何か仕事をしたいという気持ちからであった。それに共産主義のイメージは、戦後のタイでは決して悪くはなかった。(彼の提案した反共法廃止案は1946年9月12日の国会下院で、49対37で可決された一筆者)。この後、タイ共産党の方から入党勧誘のために接近してきた。最初に党の代表として訪ねて来たのは、共産党機関誌『マハーチョン』誌に同紙所有者と明記されているウィロート・アムパイであった。それまではタイ共産党との接触は全くなく、タイに共産党が存在していることさえ知らなかった。同党は1942年12月1日に創立されていたのだが、共産党は労働者(多くが華人系)や華僑学校の生徒の中で活動しており、プラサートが住んでいた世界とは、全く違ったために接点がなかった。今ではチュラーロンコーン大学文学部の学生の大半は華人系であるが、彼が同学部に在学していた時代は華人系の学生は殆どいなかった。当然、党の出版物も見たことはなかった。勧誘に来た共産党のリーダーたちと幅広い意見の交換を行った。意見交換のためにプラサートを訪問した共産党のリーダーたちは、ウィロートの他に、年配で現在は死亡したプラパン・ウィラサック(Praphan Wirasak, 1900-1974 筆名は Pho. Na Sukhothai など。中国名: 朱叟林⁴⁵⁾、『マハーチョン』の編集長サック・スパーカセム(Sak Suphakasem, 1918-?), ウドム・シーズワン(Udom Sisuwan), 1961年までタイ共産党総書記であり中国にも一緒に行った Song Nophakhun (中国名: 余松⁴⁶⁾)である。この結果、(元々仏教理想主義の傾向があった⁴⁷⁾一筆者)プラサートは共産主義の理念に共感し、1946年11月か12月初に入党した。入党した時は党内の役職はなくヒラ党员であったが、タイ国会における唯一の共産党議員であった。

党の事務所(『マハーチョン』の事務所に同じ)には、マルクス・レーニンの英語の書物が完備されていた。他の人は中国語しか読めなかったので、主にこれらの英書を読んだのはプラサートであった。タイ共産党幹部はマルクス・レーニンを読むことをあまり好まず、中国語で毛沢東のもののみを読んでいった。このようにプラサートと他のタイ共幹部とは知識獲得のソースが異なった。プラサートはマルクス・レーニンから始め、毛沢東のものも英語で読んだ。それでタイ共幹部も、プラサートは彼らよりもマルクス・レーニン主義について通じていることを認めていた。

1947年11月8日の軍事クーデターは自由タイ派(フリーディー派)政権を倒すことが目的であった。ピン・チュンハワン(Phin Chunhawan)中將、ピブーン元帥らの退役軍人たちが政権に戻ってきた。クーデターグループは、自由タイ派を弾圧し、同派の政治家を多数殺した。しかし共産党は直接の打撃は受けることはなく、我関せずと公然と党機関紙『マハーチョン』の発行を継続した。プラサートはクーデターによって民選国会が廃止され、国会議員の職を失職したので、『マハーチョン』誌のスタッフとなり、同誌に「人生観」を連載した。この連載記事はその後まとめて一冊とされ、プラサートが中国に発った後に(1949年9月に一筆者)出版された。しかし、プラサート自身、同書は楽しい読み物としての価値しかなく、マルクス主義に関する重要な基本書、教科書としては使えない、と考えている。執筆時は未だマルクス主義について十分な知識がなく、進歩的な立場の自由主義を内容とする書物であったからだ。1949年5月に、プラサートは共産党から中国に派遣された。これがタイの共産党が中国に派遣した第一陣である。同行者は、ダムリ・ルアンスタム、ルアム・ウォンパン、ソン・ノッパクンなどであった。当時は中国内戦の最終段階であった。共産党が天津を奪取した後は、国民党側は投降し

たので北京を攻撃する必要はなかった。プラサートが着いた時は共産党が北京に入城して間もない頃だった。

プラサートは 1946 年末に入党した後、2 年少し経った 1948 年に非公式に中央委員に任命された。この任命は党大会で選出されたものではない。タイ共産党は 1942 年の第一回党大会で役員を選出したが、その後第二回大会までの間は、適当な人を非公式に中央委員に任命していた⁴⁸。創立から 10 年して開催された第二回党大会で、公式に中央委員を選出された。プラサートが入党した時は、共産党は民主主義路線を採っていたので、彼と党の間には何の問題もなかった。民主主義はよいことだと賛成して入党したのだった。しかしその後、党は武力闘争路線に変更したので、彼はこれに反対し、1954 年頃一年近く北京在住のタイ共産党員内で激論したが、結局彼の民主主義路線の主張は党の主流派に容れられず、彼は別の道を歩むことになった。1958 年に帰国し、逮捕されたが獄中で特高警察への共産主義指南が評価され釈放された⁴⁹。

次に、ラムチアックのインタビュー談話を見てみよう。プラサートは 8 人兄弟姉妹の 2 番目、妹のラムチアックは 7 番目である。彼女は兄に遅れること 1 カ月、即ち 1947 年初には入党した。郷里のスラタニー県にいた末っ子の 8 番目の妹 Songsri も共産党に入党した。Songsri は同県で 1954 年に死亡するまで共産党員であった。すなわち、プラサートの 8 兄弟姉妹中 3 名が入党したことになる。初期のタイ共産党では、夫婦や親子、兄弟姉妹で入党しているケースが多い。

ラムチアックは、チュラーロンコーン大学会計学部 3 年まで学んで退学した後、西洋人の会社（宝石加工販売）に就職した。そこで 1 年間勤務した頃に、入党した。彼女によれば、共産党内の青年グループで、時々集まって政治についての意見を交換した。そのメンバーは次の通りであった。すなわち、仲間中、年齢も最も高く、かつ信用のあったルアム・ウォンパンがリーダー、ニット・ボンダープベット（戦争中よりの女性党員で党内の地位が高かった—ラムチアックの発言。以下の括弧内も同じ）が副リーダー格で、サノ・パーニットチャローン（中国に派遣されたがタイ共産党指導部とうまく行かなかった。1957 年頃、サノはソ連にロシア語学習のため留学したいと希望したが、タイ共産党は認めず、結局重慶でロシア語を学ぶこととなった。同地で中国人と結婚した。サノは華人系のはずだが、中国語は上手くない）、ニコン（公務員、党員であったが妻の反対で活動を止めた）、ソムクワン・ピチャイクン（大蔵省中央会計局の公務員、中国に派遣され、帰国後東北タイで活動中逮捕された。その後のことはよく知らないが、妻が金持ちで子供はアメリカに留学しているという）、ワート・スントンジャーモン（戦後プラサートより先に共産党に入党した労働運動家、弁護士）のむすめ、それにラムチアックらがメンバーであった。このグループは、特定の名称をもった正式の組織ではなかった。しかも共に活動した時間も短期間であった。このグループには、ルンロートというクメール人はいなかった。抑もこのグループ内にはクメール人は一人もいなかった。また、この党員の青年グループの外に、共産党系の「学生グループ」が存在した。後にウィラット・アンカタウォンと結婚した共産党員パー・ブンや、後の内務省労働局長ニコム・チャントラウィトゥン（Nikhom Chanthorawithun、共産党に入党はせず。タマサート大予科 4 期生）が主要メンバーであった⁵⁰。両グループは、大きな行事（例えばメーデーなど）では行動を共にした。チャローン・ワンガームは共産党機関誌『マハーチョン』に勤務しており、両グループと

は関係なかった。チャローンはおとなしく礼儀正しい性格（リアブローイ）で、ウィラットなど党中枢に気に入られて党内で出世した。

ラムチアックは、パスポートなしで49年11月に中国人の道案内人とタイ人女性(Nongyao Praphatthit⁵¹)の計3名でバンコクから船に乗り中国に向かった。49年12月6-10日に北京で開催されるAsian Women's Conferenceに出席するためであった⁵²。この後、1年間はタイ、マラヤ、シンガポールから来た華僑子弟を訓練する青年訓練班で学習した。訓練を受けたのは20~30歳くらいの青年男女で、人数は100人から200人程度であった。その後、マルクス・レーニン学院にて1956年まで学んだ。

その後、10年間ほど北京放送に勤務した後は家庭の主婦。夫は1949年2月26日のプリーディー派のクーデターに参加して中国に逃れてきたタマサート大学学生で、北京大学でタイ語教師をしていた。1982年に始めタイに一時帰国し、その後何回か往復した後、1992年に最終的に北京を引き払い帰国した⁵³。

以上から、ヌオン・チアは共に活動した人物としてラムチアックの名を挙げたが、ラムチアックの方は記憶していないことが判る。ラムチアックのいう共産党内の青年グループは、その構成メンバー、時期から見て、サノの語った「タイ青年会」内の共産黨員グループと同一のものであろう。ルンロート（ヌオン・チア）が共産党に入党したのは1950年であり、1947年当時には未だ「タイ青年会」の周辺で活動していたに過ぎず、友人でもないラムチアックの記憶には残らなかったのだろう。

次に、サノもラムチアックも共産党で共に活動した人物として名を挙げ、かつ、サノが1947-48年時にルンロートと最も親しかった人物であると語ったソムクワンの証言を見てみよう。

8. ソムクワン・ピチャイクンの回想

ソムクワン・ピチャイクン（Somkhwan Phichaikun, 1926年9月生）には、2005年4月1日午後、バンコク郊外のラーマイントラのショッピングセンターの珈琲店で3時間近く面談することができた⁵⁴。彼の話は次のとおりである。

自分は東北タイのナコンラーチャシーマー県のバーン・ライ（Ban Rai）郡の出身で1926年9月4日に生まれた。地元で小学校4年を終えてのち、バンコクのワット・ラカン寺に止住する同じ村出身の僧侶を頼ってバンコクに出た。自分の父はバンコクで15年間出家したことがあり、帰郷して村長（Phu Yai Ban）をしていた。母の弟もバンコクに出て、弁護士をしており、両親は自分に高等教育を与えなかった。バーン・ライ郡から国鉄シーキュウ駅まで徒歩で3~4日歩き、それから汽車でバンコクに出た。ワット・ラカン寺の僧坊に住み、私立の中学3年を卒業したのち、1939年に国立名門校であるスワンクラブ校の中学4年に入学した。当時のスワンクラブ校には中学4年から6年までの3学年しかなかった。ワット・ラカン寺で世話になっている同村出身の僧侶は、10人もの学生を預かっており、金銭的な余裕がなかったので、自分は一年中同じ服一枚で過ごした。スワンクラブ校は総じて金持ちの子弟が多かったが、学力試験で入学の可否を決めたので、地方出身の貧しい者でも学力さえあれば合格できた。同校で3年間同級生であったターニン・クライウィチアン（1927年生4月生、スワンクラブ

プから 42 年タマサート大学予科 5 期生に進学、48 年タマサート大学学士、53 年ロンドン大学法学士、54 年イギリスバリスター、55 年タイ法務省勤務、最後は最高裁判事。76 年 10 月 6 日事件後に首相に就任、左翼弾圧の反動政策で有名。現在は枢密院議員(筆者)は金持ち組で、自家用車の送迎で登下校していた。自家用車で送迎されている学生は当時ターニンを含めて 5 人しかいなかった。ターニンのスワンクラブ校同期生には、その後共産党に入党した者が、自分の外にも、ルアム・ウォンパン、チャローン・ワンガーム (1961 年タイ共産党総書記、79 年総書記在職のまま死亡—筆者) などがいるから、ターニンは学生時代に同級生から共産主義の影響を受け、その反発から強固な反共主義者になったと書いているものもあるが、これは事実ではない。学生時代のターニンは、政治に関心を有しない、全く右派の人間であり、自分たちとは意見を交換したこともなかった。しかし、自分と付き合いが全くなかった訳ではなく、自分の母の葬儀の際にはターニンも出席してくれた。スワンクラブ校 6 年生進学時に、チャローン・ワンガーム、ルアム・ウォンパン、スティー・ナートウォラタット (1927 年生、商業省外国貿易局長、ターニン内閣商務大臣—筆者) が同校に転入してきた。この 3 名がスワンクラブ校に在学したのは、6 年生の時だけで、1 年間に過ぎない。バンコクの富裕層の子弟が多いスワンクラブ校で、地方出身の貧乏学生である自分とルアムは異色であり、境遇が似ていたので親しくなった。しかし、1941 年度 (即ち 1942 年前半) に同校を卒業後は、ルアムは商業学校に進学し、自分はタマサート大学予科 5 期生として進学したので 3 年間会うことはなかった。再度、ルアムに会ったのは、彼がタマサート大学に入学してからである (タマサート大学は予科を経ずとも中学 6 年卒後 2 年以上他の学校で学んだ者も入学資格があった。ルアムはこれに該当する。) 同級生になったチャローン・ワンガームは、同じクラスにいたが、親しく口を聞くことはなかった。チャローンもタマサート予科には進まず、商業学校に進学した。自分やターニン、スティー、チャローン、ルアムらのクラスは、同学年で最も成績優秀な者 (試験成績が 70 パーセント以上) のみが属する、King クラス (Hong King) と言われるクラスであり、学生同士の成績競争が激しく相互に親しくなる雰囲気はあまりなかった。

1942 年半ばにタマサート大学予科に 5 期生 (1942 年度-43 年度在学) として入学した。同期生には、ターニン、スティー、プルワン・ワンナシーなどがいる。予科五期生は 15 学級あり、最も成績優等な第一クラス (Hong 1) から第三クラスまでを Hong King と称した。ターニンは第一クラスだったが、自分は第二クラスと第三クラスの間を往き来する成績だった。自分の成績がこの程度で終わったのは、教科書を購入する金がなかったためであり、残念であった。1944 年前半に予科を卒業し、タマサート大学に進学した。(タマサート大学アーカイブの資料では、ソムクワンがタマサート大学に登録したのは、1944 年 8 月 23 日で学生番号 17727 番⁵⁵—筆者)。予科卒業後、Donmuang 飛行場の日本軍基地の建設を請け負っていた日本の建設会社、海外土木で働いた。仕事は建設労働者の監督で、日本人上司とは英語で意思疎通した。日本軍関係で働いたのは、単に所得を得るためであり自由タイ運動とは何の関係もなかった。海外土木には戦後日本財産が敵産としてタイ政府に凍結・接収 (1945 年 9 月—筆者) されるまで働き、続いてタイ政府が開設した対連合軍協力事務所勤務した。この事務所は、タイ政府が連合国に代って在タイ日本資産 (敵産) を接収管理するために設置したものである⁵⁶。日本資産の自動車を接収に行った者の中には、車一台を着服して金を作った者もいた。自分はシーパーにあって日本の大き

な繊維品倉庫を接収に行ったが、服を数枚貰っただけに過ぎない。月給は150バーツと高給であったが、臨時の仕事であり間もなく失職した。

自分が共産党に入党したのは、1947年のことである。入党紹介者はウドム・シースワンとスワンクラブ校同期生で親友のルアム・ウォンパンであった。ウドム・シースワンはどんな問題でもマルクス主義の理論によって説明することができ、また情勢分析も明解であったので、当時知識層から高い尊敬を受けていた。『マハーチョン』の記事で少し理論的なものは、全てウドムが書いたものであった。自分はウドム・シースワンから最も影響を受けた。プラサートの著作『人生観』も少しは影響があった。ルアムを入党させたのも、ウドムである。共産党の末端組織では、自分はウドム・シースワンのサーイ（系統）に属していた。共産党員は、自分の属す系統の中でのみ活動すべきもので、他の系統のことを知ろうとすることは党の規律に反する。当時、自分が共産党員として連絡を取っていたのは、ウドム・シースワンとルアムだけである。

ロンドンでソ連系の青年団体 World Federation of Democratic Youth の大会が開催された際、(多分1945年11月10日に開催された創立大会のこと—筆者) イギリス滞在中のチュラーロンコーン大学教師サノ・タンブンユーン⁵⁷がタイの青年代表として参加した。彼は帰国後(帰国のためイギリスを離れたのは1947年4月14日—筆者)、タイでも Democratic Youth 運動を企画した。1947年11月のクーデター以前に、イギリス人がバンコクに来て、バンコクの国立博物館(ママ)を会場として、ラオス、カンボジア、ベトナム、マラヤからの青年代表をも集めた国際民主青年大会を開催した。この大会の長も、サノ・タンブンユーンが務めた。何人ものチュラーロンコーン大学の先生たちが、教え子を率いて参加し、タマサートの学生も多数参加した。開会式にはティアン・シリカン大臣が来て挨拶した。この会議の後に、タイでも「タイ青年会」が発足した。本来は「民主青年会」とすべきだが、「民主」の語は刺激的なので捨て、「青年」(Youth) だけを使ったのだ。この Youth 運動に、ルアムもソムクワンも参加した。スワンクラブの同期生であったスティーも、参加の経緯はしらないが参加していた。スティーはその後アメリカに留学し、入党はしなかった。ルンロート(ヌオン・チア)も Youth で活動していたかも知れないが、その時には、自分と付き合いはなかった。タイ共産党への入党者が増加するのは、1947年11月クーデターの後のことなので、それ以前の Youth 運動では共産党の影響力は限られていた。

連合軍協力事務所の仕事がなくなって失職したので、大蔵省中央会計局やタイ国銀行の採用試験を受けた⁵⁸。中央会計局の局長はタマサート大学で授業ももっていたので、タマサート大学生を好んで採用していた。私が中央会計局に採用され在職していた時に、ルンロートが同じ局に採用されたので同僚になった。ルンロートは色白で、性格がよかった。私とルンロートは一年間大蔵省の職場を共にしたが、その一年間は、他に気の合う友人もいなかったし、未だ二人とも子供気分が抜けていなかったもので、どこに行くにも行動を共にし、毎日一緒に食事をしていた。私はワット・ラカン寺に宿泊していたが、ルンロートはワット・ベンチャマボピット寺に宿泊しており、彼の住む僧坊に泊まったこともある。彼の小遣いは自分より多く、私に食事をおごることもあった。ルンロートはフランス語がよくできた。タマサート大学予科の入試ではフランス語の試験では一番だったと聞いたことがある。自分もフランス語学

習に興味があったので、勉強のために彼とはできるだけフランス語で話すように努め、タイ語、フランス語の混じり合った会話をしていた。彼とは当時市販されていた『マハーチョン』を読んで議論をしたり、共にウドム・シーソワンの著作を読んだりした。当時ルンロートはカンボジア人としての愛国心が強く、自国のフランスからの独立問題、貧困の問題などに関心が高かった。

自分がルンロートと付き合っていた時期には、彼はルアムとは連絡はないようであった。ルアムは(タイ共産党の中国派遣の第一陣として1949年5月⁵⁹に一筆者)中国に派遣されることになったので、それまで勤務していた海南人の啓光公学のタイ人校長の職を辞した。その後任に自分が就いたので、大蔵省は退職した。大蔵省退職時の月給は35バーツと安かったが、初任給は更に安く24バーツに過ぎなかった。啓光公学に移って200バーツの月給を得た。大蔵省を退職したのちは、ルンロートに会う機会はなかった。2年ほど校長職を勤めたが、共産党員に対する取締逮捕の恐れが強くなったので、サコンナコン県のティエン・シリカンの学校の教師に転職した。彼の学校は各校ではなく各郡に点在しており、その間を巡回しながら英語を教えた。1952年に共産党から中国に派遣され、3、4年で帰国した。

帰国後はバンコクの中学で英語教師をしながら、党活動を続け、当時党の拠点があったコーラートに定期的に連絡に行っていた。1961年のタイ共産党の第3回党大会は、参加者が一堂に会した大がかりなものではなく、地域毎に少人数の会議を開く形式で開催された。自分はコーラートの会議に出席したが、参加者は3名に過ぎなかった。1967年、自分は共産党の中央委員であったが、身近な者が裏切り、共産党関係者100人以上が逮捕された。自分もその一人で、警察に拷問を受けそうになったが、母の妹の息子が当時陸軍士官学校長という軍の要職にあったので、彼が警察に電話をかけてくれて拷問は免れた。結局5年間投獄された。出獄後はタイ湾の東海岸の都市ラヨン市で薬局を開いた。同地には妻の母がおり、最近まで同地で商売していた。同市の市長の顧問を務めたこともある。子供は4人おり、二人はアメリカに留学した。その内の一人は、インターネット関係のビジネスを起業した。

ソムクワンは大蔵省中央会計局を、1949年5月ごろに退職するまで、ルンロートと一年間職場を共にし、親密な付き合いがあったこと、ソムクワンが既に在職しているところに、ルンロートが入省してきたと語っている。一方、ヌオン・チアは1950年まで中央会計局にSamianとして3年間在職したと語っている。これらから推定すると、ルンロート(ヌオン・チア)が中央会計局に就職したのは、1947年末か1948年前半であろう。

9. ウドム・チャローンラットの回想

ヌオン・チアが、1950年にタイ共産党に入党した際、同一職場(大蔵省中央会計局)で同一細胞に属していたとして名を挙げたウドム・チャローンラットにインタビューをした経緯については前述した。

面談したウドムは、まずルンロートが生きていたことに驚いた。彼は1975年4月に民主カンボジアが成立した後、ルンロートのことを思い出して、かつてタイ共産党中央にいたピン・ブアオーン(Phin Buaoon, 1931-1999)に、ルンロートの消息を尋ねてみたことがある。ピンの答えは、ルンロートは森の中で落馬して随分前に死亡したと聞いているというものであった。ウドムは、ピンの答えからタイ共産党の中枢部さえもルンロートがヌオン・チアであることを全く把握していなかったことが判ると筆者

に述べた。

ウドムはルンロートの印象を次のように語った。通常クメール人は色が黒いが、ルンロートは中国系のように色が白かった。おとなしくて礼儀正しくソフトな人当りの人で、力を誇ったり、男らしさを誇示するようなタイプではなかった。寺院に長く住んでいた人であるから、人殺しをするような人ではない。ルンロートに会ったら、どうしてクメール・ルージュがあのようなジェノサイドをしたのかを聞いて見たい。

筆者が、ルンロート（ヌオン・チア）は仏暦 2493 年（1950 年）にタイ共産党に入党したと語ったが、と問うと、ウドムは、そうか、ルンロートは記憶力がいいではないかと答えて、事実であることを認めた。

ウドムが語った彼の経歴は次の通りである。自分は、1929 年 4 月 1 日にウボン県の農家に生まれた。某中学 6 年を卒業後、(1946 年に一筆者) タマサート大学予科 (8 期生⁶⁰) に進学した。自分の実兄もタマサート大学に学んだし、妹の夫は外交官である。予科卒業後、(1948 年 7 月 8 日に⁶¹一筆者) タマサート大に登録した。大学在学中の 1949 年 2 月 26 日のブリーチー派クーデターの頃、大蔵省中央会計局の出納課 (Kong Thanathikan) に Samian (末端の書記官吏) として就職した。Samian は正規の一般職 (パーマナント職) の公務員である。出納課とは国家予算の出納を管理する重要な役割を担う課であった。(同課は 1995 年 2 月 10 日の中央会計局組織改革により廃止されるまで存続した⁶²一筆者) 自分がこの課に就職した時には、ルンロートは既に Samian として同課に在職していた。その後、ルンロートが退職して外務省に移るまで、彼と約一年間、職場を共にした。ルンロート（ヌオン・チア）は、私を含む同じ職場の公務員 3 名⁶³でタイ共産党の細胞を作っていたと言ったそうだが、それは事実である。自分が 1950 年に未だ中央会計局在職中のルンロートを勧誘して、入党させたのである。自分がこの細胞の長 (Huana Nuai) であり、ルンロートはこの細胞メンバー (Luk Nuai) であった。もう一人のメンバーは年齢が上で、現在 (2003 年当時) 80 歳くらいであろう。その名は伏せておきたい。それは、ソムクワンではない。ソムクワンが中央会計局に勤務していたことは事実だが、私の細胞ではない。ソムクワンはその後、華僑学校のタイ人校長をしていた。また、後に入党するサムパット・プンプラデット (Samphat Phungpradit, タマサート大学予科第 7 期一筆者) も中央会計局に勤務していたが、当時は未だ党员ではなかった。

ルンロートは外務省の入省試験を受けて合格し採用されたが、一カ月程度勤務しただけで、カンボジアに帰った。ルンロートは自分にクメール・イサラクの活動家でスリンにいたクメール人の親類の話しをしたことがある。また、Sieu Heng は親類だと言っていた。Sieu Heng ではないが、カンボジアの共産主義活動全体を取り仕切っていたベトナム人と自分は一緒に 6 カ月ほど暮らしたことがある。その人の名前は思い出せないが、私がルンロートに会って話せば、直ぐに判るだろう。ルンロートはカンボジアに住む親類で、運動の長である人物と連絡を取っていた。この長がベトナム側と連絡をしていた。この人物によってルンロートは組織内で出世したのだと思う。ルンロートがタイに居た 1950 年までのタイ共産党の共産主義理論レベルは低かった。プラサートの『人生観』などの書物はあったが、これは扇動の書であり理論書ではない。タイ共産党員が理論を身につけたのは、中国に派遣され中国で学習する

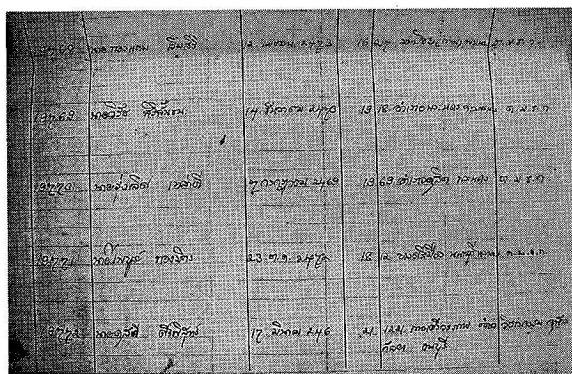
カンボジア共産党ナンバー・ツー、ヌオン・チア (Nuon Chea) のバンコク時代 (1942 年-1950 年)

ことによってであった。故に、ルンロートがタイで共産主義についての高いレベルの理論を身につけたとは考えられない。自分の推測では、ベトナムで訓練されて理論水準を高めたのであろう。

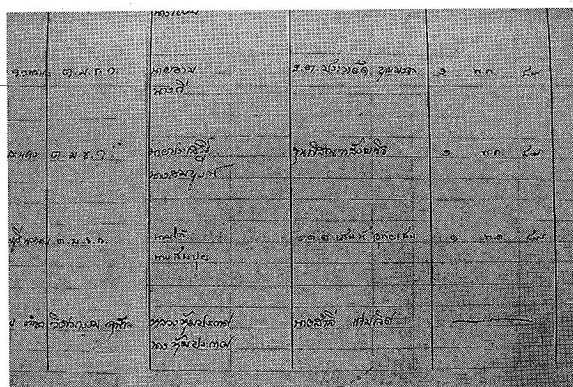
ルンロートが帰国してから大部経ってから、(1951 年に⁶⁴—筆者) 自分は、中国に派遣された。中国では「呉楊」(Wu Yang) という名を用いた。(1957 年に⁶⁵—筆者) 中国からタイに帰った後、タイ共産党と見解が異なり離党した。タマサート大学に復学して 1964 年に卒業した。

10. タマサート大学学生台帳 (Academic Records) に見るヌオン・チア

ルンロート・ラオディー (รุ่งเลิศ เหล่าดี) がタマサート大学予科に第 7 期生として 1944 年前半に入学したことは前述した。入学時は丁度、第二次大戦の末期に当り、連合国軍のバンコク空襲も開始され、一方自由タイ運動も本格化した頃に当る。タマサート大学第 8 期生のウドム・チャローンラットによると、第 7 期生は、まともな授業は入学後 1 カ月程度しか受けていない。ルンロートと同期生 (第 7 期生) である、元国会議長プラムアン・サパーワス (Pramual Saphawasu, 1927-2002) の葬礼記念本には「父 (プラムアン—筆者) はタマサート大学予科第 7 期生に入学したが戦争が激しくなったため、学校は閉鎖され、郵送の方法で学習せざるを得なかった」⁶⁶ と書かれている。



ルンロート・ラオディー (下から 3 行目) のタマサート大学登録簿



ルンロート・ラオディーのタマサート大学登録簿 (続)

タマサート大予科7期生はそれでも翌45年には第二学年に進級した。タマサート大学に保存されている、「タマサート大予科第7期生第2学年(1945-46年)名簿」によると第二学年生のクラスは全部で24クラスあるが、ルンロート・ラオディーの名は、第9クラス(Hong 9)の筆頭にある⁶⁷。

筆者がこの点をウドムに語ったところ、ウドムは「それではルンロートの成績は、優秀な方だ」とコメントした。タマサート大学予科では第一クラス(Hong 1)、第二クラス(Hong 2)など番号がついていた。番号の数が少ないほど、成績上位者のクラスであったからである。

タマサート大学文書館保存の「タマサート大学、学士課程登録名簿、登録番号15026番から20000番まで」によれば、ルンロートがタマサート大学に登録したのは、1946年5月1日で登録番号は19770番である。登録時の記録から、次のことが判る。即ち、ルンロート・ラオディー(ヌオン・チア)は、1926年7月7日生れ、登録時年齢19歳、住所はドゥシット区の69番(ベンチャマボピット寺の現在の住所は69 Rama V Road, Dusit Districtなので、同寺の住所であると思われる一筆者)、父の名はプラサート(Prasert)、母の名はソムブーン(Somboon)で、保証人はクン・ピサンサンカキットである⁶⁸(前頁写真参照)。

次に、20歳直前の1946年5月にタマサート大学に進学したヌオン・チアの、大学での学業成績を見よう。

ウドムやブラチュアアップによれば、当時のタマサート大学は最短では3年間で卒業することができたが、学年毎に合格すべき科目が定められており、学年指定の全ての科目に合格しない限り、上の学年には進学できない仕組みであった。中には3年かかっても、1年生の単位取得ができない人もいた。タマサート大学の科目は、科目毎に配当点数が異なった。例えば、「憲法」のように30点くらいの重い科目もあれば、一方で「選挙」のように10点程度の軽い科目もあった。学生は試験を受ける毎に、各受験科目の科目考査料を納入した。これが大学の唯一の収入であり、実質上の学費であった。その額は重い科目では高く、軽い科目では安かった。全科目の試験に合格して卒業する前には、面接試験が実施されていた。

ルンロートは1946年5月にタマサート大学登録後、同年10月に最初の試験を受けた。第一学年で取得すべき科目は、「基礎知識」、「自然人法人」、「刑法第一部」、「憲法」、「選挙」、「裁判所法」、「物権」の7科目である。「1946年10月1日試験、学士課程第一学年生の筆記試験・口頭試験の成績表」によると、ルンロートは7科目全てを受験したが、合格したのは刑法第一部と裁判所法の2科目のみであった⁶⁹。この成績表で見る限り、例外的に7科目中6科目に合格した者もいるが、学生の多くは7科目中2~3科目の合格であるので、ルンロートの成績は平均的なものであったと言える。続いて1947年1月の試験では、残る5科目全てを受験したが、合格できたのは「自然人法人」と、「選挙」の2科目のみであった⁷⁰。

一年後の1948年1月の試験では、残る3科目を受験し、「基礎知識」、「憲法」の2科目に合格した⁷¹。一年生指定科目中、残る最後の科目、「物権」には、1948年10月の試験で合格できた⁷²。即ち、1946年5月1日にタマサート大学に登録後、2年半を要して一年生の指定科目、7科目全てに合格したのである。特に1947年1年から翌年48年10月までの2年近い期間の単位取得のスピードが速い。

筆者がウドムにこの成績結果を示すと、ウドムは次のようにコメントした。即ち、ルンロートは、政治活動と公務員としての仕事のために、学習時間が少なく、なかなか合格できなかったものと考えられる。もし普通に勉強する時間があれば、合格できていたはずだ、と。47年は、前述したようにルンロートがルアムらの指導するタイ青年会の運動に参加した年であり、また、48年初前後は、大蔵省中央会計局に就職した時期でもある。1947、48年のルンロートは、学業に専念できるような環境にはいなかったに違いない。

しかし、タマサート大学第2学年に進んだ48年末から50年初にかけて、彼は俄然学習に精を出したようだ。

二年生の指定科目は次の8科目から成る。民商法関係の6科目、即ち「法律行為・債務」、「担保」、「売買」、「賃貸借」、「借用」、「代理」の外に「刑法第二部」と「行政法」である。彼は、48年10月に第一学年指定科目全てに合格してから1年3カ月後の、1950年1月に第二学年指定全科目を受験し、「売買」を除く7科目に一気に合格した⁷³。これは1950年始めまで、彼が依然タマサート大学卒業に強い意欲を持っていたことを示している。タマサート大学で学ばなければならない科目の殆どは資本主義社会を対象とした技術的専門的な法律科目であるが、彼はこれらの科目を次々に受験している。1950年は、大蔵省の中央会計局の公務員を辞職し、外務省の採用試験を受験し外務省に就職した年である。23歳の彼は1950年のある時点までは、「タイの大学を卒業してタイで高級官僚になる」ことを、今後の人生の選択肢の一つ、しかもウェイトの高い選択肢として大切にしていたように推測される。この年に彼が共産党に入党したことを以て、彼は、高級官僚への可能性を自ら断念したと断言するのは早計にすぎる。何故なら、本稿で見たように、学生時代にタイ共産党に近い位置にありながら、その後高級官僚になったニコム・チャントラウィットウン（内務省労働局長）やスティー・ナートウォラタット（商務省外国貿易局長、商務大臣）などの例もあるからである。

とは言え、1950年のある時点で、彼はその将来設計を大転換した。前年と同じ程度に努力すれば、あと1年ほどでタマサート大学第3学年の指定科目の単位を取得し終えて大卒の資格を得ることができ、現実味を増した時点で、彼はタマサート大学での勉学の継続も、わざわざ試験を受けて採用されたばかりのタイ外務省の公務員の地位も突如として捨て去ったのである。

1950年10月の試験で、彼が唯一残る二年生指定科目「売買」科目を受験したかどうかは、偶々この回の資料がタマサート大学文書館に保存されていないために不明である。記録が残る1951年1月の試験の受験生リストの2年生にも3年生にも彼の名は見いだせない⁷⁴。

11. どうしてタイを去ったのか

ヌオン・チアは3年制のタマサート大学に4年余在籍し、第二学年指定科目に殆ど合格し、卒業まで1年余を残すに過ぎなかった。しかし、彼は大学を卒業することなく、また採用されて1カ月しか経ていないタイ外務省を退職して、1950年後半に、バンコクから突如姿を消した。タイ国籍を有し、同時代の地方出身のタイ人中中学生、大学生と何等変わることのない8年間のバンコク生活を過ごし、タイ人エリートになる軌道に乗ることに成功し、少なくとも一時期はタイ社会の中に自分の将来を描いていたよ

うに見えた、24歳のルンロート・ラオディー（ヌオン・チャ）は、1950年後半カンボジア解放の闘争参加のため祖国に旅立った。彼を旅立たせて理由は何であろうか。

冒頭でタイ人女性記者 Nusara Thaitawat がヌオン・チャとのインタビューを Bangkok Post 紙（2006年4月18日号）上に発表したことを紹介した。筆者は、彼女がヌオン・チャの発言を他の資料と照合して検証することを怠ったため、ヌオン・チャの記憶違いをそのまま事実の如く書いていることを批判した（注6参照）。同じ記事のなかで、ヌオン・チャがタイからカンボジアに旅立った理由については、彼女はヌオン・チャの発言には依らず、自己の推測に基づく非現実的な解釈を加えている。彼女の説明によれば、ヌオン・チャは1947年（ママ）に外務省の職員採用試験に合格したが、外務省で与えられた地位は前の大蔵省で与えられていた地位と同じ最下級の書記の地位であった。外務省がホンモノのタイ人には与えている専門的な地位を、自分には与えなかったので、ヌオン・チャは、不平等な処遇に不満を抱いて三年後の1950年にタイを去る決心をしたというのである⁷⁵。

彼女の書くヌオン・チャの外務省入省年は3年も事実と異なっているだけではない。彼女の解釈が無理なことは、1950年当時有効であった「1942年文官規則法」⁷⁶の規定を読めば一目瞭然である。同法は、一般職国家公務員採用試験を受験できる要件の第一としてタイ国籍を有すること（第31条）を挙げている。一般職国家公務員には、最下位の4級官から、3級、2級、1級、最高の特級まで5階級あり（第7条）、また、職位は、下から書記（samianphanakgan）、係付、係長、課長、部長、局長、事務次官の7種がある（8条）。書記職には4級官を任じ、係付は4級官11号以上もしくは3級官を、係長は3級官もしくは2級官を、課長には2級官もしくは1級官を任じる（第25条）4級官1-3号の受験資格は中卒、4級官7号の受験資格は大学予科卒、3級官の受験資格は大卒もしくは4級官6号以上に5年以上在職したものである（第35条）。

以上の法律の規定から、次のことが判明する。即ち、タイ国籍を有するタマサート大学在学中の者は、大学予科卒の学歴資格で4級7号官の採用試験を受験することができる。合格した場合は、任じられるポストは、一番低い書記職に限られている。予科卒学歴のまま5年以上在職するかタマサート大学を卒業して学位を取得した場合、3級官の試験を受験できる。合格すれば、書記（Samian）職より一つ上の係付のポストに任じられる。

すなわち、1950年時のルンロート（ヌオン・チャ）には、大卒の学歴を得るか、書記の職に少なくともあと2年（既に在職した3年を加えると合計5年となるので）在職しない限り、法律の規定によりどの官庁を受験して採用されようとも、任じられることのできる職位は、書記以外はあり得なかったのである。これはウドムヤソムクワンなどの「ホンモノのタイ人の」場合も全く同様である。彼が「ホンモノのタイ人ではない」ので、外務省で差別を受け書記ポストしか与えられなかったのではない。抑も彼はタイ国籍を有していたので国家公務員採用試験を受験することができて、採用されたのである。多様な民族種族からなるタイにおいて、官庁がタイ国籍を有する者に対して、民族種族的違いを主要な理由として差別することは普通では考えられない。（勿論、人脈やコネはハバを効かすであろうが。）当時の彼の学歴と公務員在職年数では法律の規定上、書記を超えたポストは望み得ないのである。タイ国籍の法律家として大学で訓練を積みつつあったヌオン・チャにとって、これはあまりにも自明なことであっ

たであろう。

タイ人エリートとして生きる道を捨て、敢えて苦難の道を選び、カンボジアの故郷に戻ったのはどうしてか。より事実に即した説明が必要である。当時のヌオン・チアの心にあったものは、カンボジアへの熱烈な祖国愛以外に何かあったであろうか。

おわりに

本稿は、従来殆ど明らかにされていないヌオン・チア（バンコク時代の氏名は、ルンロート・ラオディー）の、16歳から24歳（1942年-1950年）までのバンコク時代を、極力正確、詳細に明かにしようとした。そのため、筆者はヌオン・チアと直接インタビューを実施し、それによって得た彼の証言を、1940年代後半に彼と活動を共にしたサノ・パーニットチャローン、ソムクワン・ピチャイクン、ウドム・チャローンラットなどの元タイ共産党との直接面談で得た証言や関連資料と対照し、かつ彼が在学、在職したベンチャマボピット学校、タマサート大学予科、タマサート大学、タイ外務省が保存する一次資料とも対比した。

上記の調査によって、明らかにしたヌオン・チアのバンコク時代は次のように要約できる。彼は1926年7月7日にバットンバンで出生したが、バットンバンが1941年にタイ領に復帰し、タイ国籍を得た後、バンコクのワット・ベンチャマボピット寺に住む同郷の僧侶を頼ってバンコクに上京した。同寺の僧房を住居とし同寺付属の学校で1942年、43年度の二年間を学び、中学を卒業した。バンコクで用いた氏名は、ルンロート・ラオディーである。1944年初めに中学卒業後、直ちにタマサート大学予科（2年制）に進学した。同予科の第7期生であり、比較的優秀な成績で1946年初めに予科を卒業。直ちに1946年5月1日にタマサート大学本科に登録した。

当時のタマサート大学本科は最短3年で卒業可能であったが、彼が1年生の全科目（7科目）全てに合格したのは登録後2年半を経た1948年10月である。これは1947年に彼が共産党員の学生ルアム・ウォンパンに勧誘され、共産党系の「タイ青年会」の活動に参加したこと、および1947年末か1948年初頃に大蔵省中央会計局出納課に国家公務員（職位は書記）として就職したため、時間的余裕がなかったためであろう。1947年の「タイ青年会」への参加は、彼にとって最初の政治活動の経験であったと思われる。政治活動や職場で知り合った親しい友人には、既に共産党に入党していた者もいたが、彼は1950年まで入党せず、4年間を共産党系の青年運動の周辺部で過ごした。

48年10月にタマサート大学第一学年指定科目全てに合格してから1年3カ月後の、1950年1月に、彼は第二学年指定全科目を受験し、「売買」を除く7科目に一気に合格した。彼がタマサート大学で学んだ科目の殆どは資本主義社会を対象とした法律の専門科目であった。1950年に、彼は大蔵省で職場を共にするウドム・チャローンラット（タマサート大学生）の紹介でタイ共産党に入党した。彼はウドムを長とする3名からなる職場細胞のメンバーとなった。その後、同じ年に彼は外務省の採用試験を受けて合格し、大蔵省を辞した。しかし、外務省も在職僅か1カ月で退職し、タマサート大学での勉学も3年生科目を学ぶことなく放棄し、カンボジアの反仏闘争に参加のため帰国した。

本稿ではヌオン・チアのバンコク時代を明らかにする過程で、彼と関係があったもしくは時代を同じ

くしたタイ共産党員の党活動の履歴についてもできるだけ詳しく書いた。本稿が名を挙げた共産党員は、①華人系党員、②タイ人で高学歴の党員、の二種類に分けることができる。①に当るのは、ウィロー・アムパイ（黄君玉）、ウラット・アンカターウォン（洪書従、北京名「張遠」）、ウドム・シースワン（姓は史、延安では「高漢」）、ソン・ノッパクン（余松）、ダムリ・ルアンスタム（呉維實）、ニット・ボンダープペット（伍勤英）らであり、②に当るのはプラサート・サップスントン、ルアム・ウォンパン、チャローン・ワンガーム、サノ・パーニットチャローン、ソムクワン・ピチャイクン、ウドム・チャローンラット、などの人々である。

①はタイ生れの華僑の子弟であり、戦前のバンコクの華僑学校（黄魂学校、崇實学校、新民学校、中華中学など）で初等もしくは中等教育を受け、華僑学校の中共系中国人教員の影響下に1930年代の終わりから共産党員として活動をした中国系の人々である。②は①と年齢的には大きな違いはないが、タイの地方県の生れで、バンコクで国立の中高等学校で教育を受け、1945年以後①の影響によって共産党の活動に加わった人々であり、タイ人の共産党員としては初めての世代である。タイの共産党は、1920年代末に活動を開始して以来、メンバーは華僑・華人、ベトナム人が大半であった。共産党は、指導者となるようなタイ人の獲得を重視していたが、それが実現したのは第二次大戦後になって②のタイプのタイ人を獲得することによってである。

ヌオン・チアは、クメール人として両者とは別の第三のカテゴリーに属するものではなく、正に②グループの一人である。彼はバンコクで僧坊に居住し、中・高等教育を受けたが、これはタイの地方出身の学生たちと全く同様である。また、タイ国籍を有する彼はタマサート大学本科に進学後は、大蔵省、外務省に国家公務員として働いたが、これもタマサート大学に学ぶ学生（含む共産党員あるいはシンパ）には通常のことであった。ただ、彼は常に祖国カンボジアに深い関心を有した点で、他のタイの地方出身のタマサート大学生の共産党員やシンパとは異なった。それ故、ルンロート・ラオディー（ヌオン・チア）は、1950年に24歳で別の道を歩き始めたが、それ以前の彼は、間違いなくタイ共産党のタイ人第一世代の一人であった。

注

1. David P. Chandler, *Brother Number One: A Political Biography of Pol Pot* (Revised Edition), Westview Press, 1999, p. 54
2. Ben Kiernan, *How Pol Pot Came to Power: A History of Communism in Kampuchea, 1930-1975*, Verso, London, 1986, p. 59
3. www.ahrchk.net/news/mainfile.php/ahrnews_200106/1022/
4. タイ文字をローマ字表記する場合、いくつかの方法がある。Rungloet Laodee というローマ字表記も可能である。
5. www.dccam.org/Archives/Documents/Biography/Nuon_Chea_Chronology_Final.pdf
6. 少々長くなるが、Nusara Thaitawat が、2006年4月17日付けで、Documentation Center of Cambodia のHPに書いている Nuon Chea in brief および2006年4月18日 Bangkok Post の記事の誤りを指摘しておきたい。まず、Nuon Chea in brief に関して、1944年の項に“Enrolls at Thammasat University under the name *Runglert Laodi*, shortly thereafter, joins the Youth for Democracy Movement of Thailand, under the Community Party of Thailand (CPT).”と記しているが、1944年にはタマサート大学に入学したのではなく同大学予科（2年制）に入学したのである。また、ヌオン・チアは筆者に対しても1944年に民主青年運動もしくはタイ青年会の運動に参加したと語ったが、本稿が明らかにするように1947年の誤りである。1945

年の項には、“Quits Thammasat to work for the Comptroller General Department, Finance Ministry in Bangkok.”と記すが、この年にはヌオン・チアは未だ予科生であり、タマサート大学に入学さえしていない。彼は本稿が明らかにするように、タマサート大学に在学し続け、1950 年にタイを発つまで中途退学したことはない。また、彼が大蔵省に就職したのは1945 年ではなく大学に進学した後の1947 年末前後である。更に、1947 年の項に“Ordains for one season at Wat Samrong, Chachoengsao province (east of Bangkok), then returns to Bangkok, wants to join the Foreign Ministry. However, denied a professional position and instead given the same level clerical job as he held at the Finance Ministry, decides to quit working after one month, to join the fledgling pro-democracy student movement in Thailand and the CPT.”と記しているが、タイ外務省の記録からヌオン・チアが同省に在職したのは1947 年ではなく1950 年である。また、大蔵省時代と同じ下級の職しか与えられなかったので憤慨して辞めたと推測しているが、これは本文で述べるように大きな誤解である。Bangkok Post の記事の中でも同様の無理な解釈を述べている。それにヌオン・チアがタイ共産党に入党したのは1947 年ではなく1950 年である。加えて Bangkok Post の記事は、カンボジア人のジェノサイド調査者にタマサート大学がヌオン・チアの学業記録の情報開示をせず、非協力だと批判しているが、彼のタイ名さえ判れば、同大学のアーカイブズで比較的容易に調べることができることは本稿で示す通りである。

- 7 調査は2005 年前半までにほぼ完了したが、その直後から2 年半バンコクの国立公文書館、国立図書館において、タイ華僑史および日タイ関係史資料の調査に没頭することになったため、本稿執筆のための時間的余裕がなく今日に至った。
- 8 この調査旅行には、当時アジア太平洋研究科修士2 年在学のカンボジア人留学生 Ourn Pheakiny 氏、東京外国語大学菊池陽子専任講師、神戸大学伊藤友美専任講師が同行した。
- 9 この点に関して、ヌオン・チア訪問に同行した伊藤友美氏の次の論文を参照されたい。「カンボジア仏教：二つの共産主義政権の経験と社会への関わり」、『国際文化学』(神戸大学国際文化学会)、第10 号、2004 年3 月、pp. 17-35.
- 10 筆者の推測では「劉」姓だと思われる。
- 11 当時のピブーン政権は独立国タイの優秀さを近隣のフランス植民地の住民に向け宣伝していた。
- 12 タイでは仏暦2480 年(1937/38 年)から、中等教育6 年プラス大学予科2 年制を開始した。それ以前は、中等教育は8 年制(8 年卒はマタヨムポリブーンという)で大学予科は存在しなかった。マタヨムポリブーン制度は2481 年で廃止された(National Archives of Thailand (以下、NAT) Ko. To. 43. 24/118) タマサート(当時はタマサート・レ・ガーンムアン大学「法學政治学大学」と称した)大学の予科一期生は仏暦2481 年(1938/39)入学で、7 期生は仏暦2487 年(1944)入学。
- 13 ニット・ボンダーブペット (Nit Phongdapphet, 1927. 3. 31-2000. 10. 5, 中国名は、伍勤英), バンコク生で、廣肇公学から1937 年に中華中学に進学したが、1939 年8 月に中華中学がタイ政府から強制的な閉校処分を受け、失学した。『泰国中華中学校校友会特刊, 1993 年』pp. 238-239, には、「初中第13 級全班同学名单」中に伍勤英の名があり、通訊地址は、「中国北京人民広播電台泰文部顧問」となっている。ニットは戦争直前にコーラートで共産党の活動を開始し(Interview with Damri Runagsutham at Bangkok on 11 Sept. 2004) 戦中は抗日運動に参加した女性党員。1952 年に中国へ渡り、1959 年から北京国際放送に勤務した。1962-1967 北京の外文出版社、1967 年6 月から2000 年に死亡するまで北京国際放送に勤務。(Anuson Nit Phongdapphet, 2000, p. 1) Anuson Nit Phongdapphet には、ニットは1952 年に中国に行ったと記されているが、1951 年8 月の東ベルリンの世界民主青年連盟(WFDY)・国際学連(IUS)による世界青年学生祭典(The 3rd World Festival of Youth and Students, Berlin, 1951)に中国、ベトナム、朝鮮の代表団とともに、タイ代表団長として中国、モスクワを経てベルリンに入っているから、1951 年の7 月には既に中国に滞在していたはずである。
- 14 1945 年10 月25 日に週刊『マハーチョン』が創刊された。戦争中の42 年から地下版が、出版されていたが、それを公然化したもの。
- 15 Udom Sisuwan (1921-1993.10.7), タイ北部のLampang 県 Kokha 郡出身の海南(瓊)系華人。筆者が、1992 年12 月25 日にウドム・シースワンにインタビューした記録(Interview with Udom Sisuwan at Bangkok on 25 Dec. 1992), および彼の火葬時の記念本(Nangsu apnen Anuson khamnungthung Udom Sisuwan nuangnai Ganchapanakitsop, 4 Dec. 1993)などを主な資料として、彼の経歴を記すと次のようになる。彼は、1921 年生。(呉鶴川によれば、ウドムの娘からウドムの父は海南人、母はベトナム人と聞いたという。1994 年1 月23 日、呉鶴川との筆者のインタビュー、バンコク), 16 歳の時、ラムバーン県のアメリカ人の Mission school, Kenneth Mackenzie School の中学4 年生程度を卒業。ラオスを通して北ベトナムのハイフォンに行き車の修理工や運転手に。ハイフォンで中国人の抗日グループと知り合う。看護士(Burut Phayaban)に転職後注射に行ったことがきっかけで知り合った中国共産党員の中国人の紹介で、中国赤十字の看護士として中国に移動した。(葬式本では湖南省の国民党の軍隊の看護士)在中国の期間は、1939-1945 年。1940 年に中国共産党か

ら延安にいる米人の英語通訳として延安に送られる。延安では文芸 (sinlap) と政治経済学も学ぶ。(葬式本では、1940年に政治経済学と文芸とを学ぶために延安に入り、1944年に山西省西部の外事部に働き、米軍情報員が日本人捕虜を尋問するのを支援した。1945年初、日本軍に撃墜された B29 機の乗員救出のため敵後に潜入する部隊に参加)。彼が筆者のインタビューで語ったことと、葬式本の内容とは一致していない部分がある。更に彼が筆者に述べた経歴や葬式本の記述は、果して事実であろうかという疑問も残る。というのは、彼の遠縁者は、ウドムはラムパーンのミッションスクールで学んだ外に、海南島で教育を受けたと語っているし、サノ・パーニットチャロンの筆者への話では、ウドムはサノに戦前にバンコクで活動していたと語ったという。また、ダムリが筆者に語ったところでは、ウドムはバンコクの黄魂学校に学んだことがある。ウドムは1938年当時バンコクで活動した可能性は高い。当時バンコクで発行された華字紙には「高漢」という筆名を用いた、ウドムらしい人物の詩も掲載されている。例えば、『中華民報』1938年10月12日の副刊欄「椰風」に「高漢」という筆名の人物が、抗日戦参加のため祖国に帰る決意を母親宛に書いた詩、「給我的媽媽」が掲載されている。続いて、「高漢」が書いた、バンコクから昆明への旅行記が華字紙に掲載された(『華僑日報』1939年5月8日)。ウドムは延安で「高漢」という名で幹部訓練を受けたことは、『中国共产党通史、第4巻』(湖南教育出版社1995年)からも明かである。彼が戦後タイに戻って最初から党幹部であったことを考えると、彼は戦前の一時期バンコクで活動していたと見る方が合理的ではないだろうか。

- 16 著者名はヌオン・チアの記憶違い。この書の著者は Pho. Na Sukhothai で、タイ共産党のマハーチョン出版社が1950年4月に刊行した。Pho. Na Sukhothai, *Thang Ook Khong Thai*, (Bangkok: Samnakphim Mahachon, April 1950, 98 p.)
- 17 Sanoh Phanitcharoen が英語からタイ語に翻訳した (*Nation Sut Sapda*, 6 Dec. 2004, p. 31)
- 18 Prasot Sapsunthon, *Chiwathat*, (Bangkok: Rongphim Uthai, Sept. 1949, 122 p.)
- 19 著者のプラサート自身も『人生観』について次のように語っている。「本書は楽しい読み物としての価値しかなく、重要な基本書、教科書としては使えない。書いた時はマルクス主義に十分な知識がなく、進歩的な立場の自由主義の内容に止まっているからである。」(Interview with Prasot Sapsunthon at Bangkok on 16 June 1981)
- 20 Poc Khun については、村嶋英治「1940年代におけるタイの植民地体制脱却化とインドシナの独立運動」、村嶋英治、白石昌也等著『ベトナムとタイ』大明堂、1998年参照。
- 21 *Thamniam To. Mo. Tho. Ko.* (Bagbkok: Rongphim Mahawithayalai Thammasat, 1952) pp. 249-269.
- 22 両氏は1960年代に共に内務省の加速的農村開発局に勤務したこともある親友。
- 23 *Anuson nuang nai ganchapanakit sop Nai Ruam Wongphan*, 1995, p. 47.
- 24 日刊 *Phuchatkan* 30 March 1995.
- 25 詳しくは本稿ソムクワン・ピチャイクンとの筆者インタビューの項を参照のこと。
- 26 タマサート大学所蔵の学生台帳には、「入学登録、1944年10月19日」と記載されている。(Thammasat University Archives, (1) Mo. Tho. 23.4.4/3, "Samutthabian Mahawithayalai, Thammasat Bandit, 15026-20000", p.315) しかし、これは誤記であると思われる。何故かという、*Anuson nuang nai ganchapanakit sop Nai Ruam Wongphan*, 1995 に、大学がルアムに支給した学生記録の現物写真が掲載されているが、それによれば大学当局は「入学登録、1944年7月19日」と明記しており、出願費も同日に納入と記しているからである。
- 27 Thammasat University Archives, (1) Mo. Tho. 23.4.4/3, "Samutthabian Mahawithayalai, Thammasat Bandit, 15026-20000", p. 315
- 28 ウィロート・アムパイの生家はバンコクのター・ティアンのアムパイ商店という卸問屋で、地方の小売店に商品を卸していた裕福な家庭 (Interview with Damri Ruangsutham at Bangkok on 13 July 2005). 中国名は黄君玉。1931年10月に中華総商会主催でバンコクの全華校の代表による中国語、暹羅語コンテストが実施されたが、暹羅語コンテストで高学年の部で最高点を得たのは、黄魂学生の黄君玉(『中華民報』1931.10.20, p. 18)。バンコクに開校したばかりの中華中学に進学したが、1936年3月同校のストに参加して退学処分を受けた(『中華民報』1936.3.30)。このストは暹羅共産党の指導の下に行われたものであった(欧陽惠述『バンコク、延安、そして北京——老華僑共産党員の回想』(村嶋英治・鄭成編、近刊、参照)その後、暹羅共産党のメンバーが牛耳っている華僑学校の一つ、啓明学校の教師(非常勤)、1940年頃に組織された共産党のタイ人小組の主要メンバーで、タイ仏印戦争時には徴兵された(前出ダムリインタビュー)。戦争中の1944年12月23日に成立した、タイ共産党下の「反日大同盟」の書記長。ウィロートは、空襲が激しくなった戦争末期にチュラーロンコーン大学夜間新聞学コースが一時閉鎖になるまで1年半同コースに学んだ。同コースは1940年に開講し一期生200人ほどが入学、毎年200人近い受講者があった。2年コースで、大学入学資格のない大学予科在学学生や専門学校生など中学6年卒程度の学歴の学生も受け入れた。しかし殆どは修了証を得ることなく辞めた(Khana Naksuksa wichakan nangsuphim Chulalongkorn Mahawithayalai, *Wichakan nang-*

uphim Chulalongkorn Mahawithayalai, 1952, p. 30, 32.)

- 29 泰国帰僑聯誼会〈英魂録〉編委会編『泰国帰僑英魂録, 第4巻』, 北京, 中国華僑出版社, 1997, p. 76, および *Phuchatkan* 30 March 1995.
- 30 Interview with Damri Ruangsutham at Bangkok on 11 Sept. 2004.
- 31 『真話報』新第20号 (1946年12月8日号) 掲載の「乃巴色加入泰共声明」による。乃巴色はナーイ・ブラサートと読む。
- 32 Interview with Pa Phung at Bangkok on 5 June 2004.
- 33 *Anuson nuang nai ganchapanakit sop Nai Ruam Wongphan*, 1995, p. 49.
- 34 チャローン・ワンガームはウィロートにオルグされ戦争最末期に日系工場で反日サボタージュに参加した。しかし、共産党に入党したのは機関誌『マハーチョン』を公然と出版する際 (第一号は1945年10月25日出版一筆者), 同誌登録のために中学8年卒以上の学歴者が必要であり, 党员中にこのような要件を充足する者が少なかったため, 学歴のあるチャローンを入党させ, 『マハーチョン』の記者にしたという (Interview with Damri Ruangsutham at Bangkok on 29 Aug. 2004)。ルアムとチャローンが親しかったことは, 日刊 *Phuchatkan* 30 March 1995.
- 35 Prachuap Amphasawet, *Phlik Phaendin ton Khabuankan Sangkhomniyom nai Thai*, Sukhaphaochai, 2003, pp. 27-30.
- 36 Interview with Pa Phung (Somphon Angkhathawon) at Bangkok on 5 June 2004. Pa Phung (1929年生) によれば, 彼女は17歳で共産党に入党した。当時は, 共青团は未だ存在していなかった, 入党後ニット・ボンダーブペットの小組に属していた。
- 37 *Nation sut Sapda*, No. 659 (17 Jan. 2005), p. 33.
- 38 “Student Meeting Hears Border Return Appeals: Hope that Siam still may be able to regain some of the Indochina border territory returned to France, either by appeal to the United Nations or by negotiations with France was expressed by several speakers yesterday at a public meeting sponsored in Saranromya Garden by the Siamese Youth Organization. Nai Ruam Wongsebandhu (Ruam Wongphan のバーリ語風綴り一筆者), student at the University of Moral and Political Science (タマサート大学の英語名一筆者), opened the meeting at 11 a. m. He explained that the meeting was called to hear the opinion of those who felt that the border territories were an integral part of Siam and who felt that some means should be found. …” (*Bangkok Post* 1 Sept. 1947) なお, 当時タイは英語の国名のみ Siam と変更し, タイ語の国名は Thai のままだった。それ故「タイ青年会」の英語名は Siamese Youth Organization となっている。戦後フランスがタイに対して1941年にフランスから回復した旧仏印領土の返還を強制したことに関して, タイ共産党は反対する立場を取った。例えば, 共産党員の労働指導者ダムリ・ルアンスタムが指導する三輪自転車労組はフランス植民地主義にタイが領土を再び失うことに抗議して演説会を開催したが, この場でタイ共産党代表としてワート・スントンジャーモン (1892-1954) が演説した (Damri Ruangsutham, *Panyachon pathiwat khong chonchan kamakon Thai* (『タイ労働者階級の革命的知識人, ワート・スントンジャーモン』) 1998, p. 8.
- 39 *Anuson nuang nai ganchapanakit sop Nai Ruam Wongphan*, 1995, pp. 30-33.
- 40 *Phuchatkan*, 31 March 1995. なお, ルアムの処刑は, 『人民日報』1968年5月4日号が非難している。
- 41 サノがタマサート大学予科第6期生 (1943-44年度在学) であることは, *Thamniap To. Mo. Tho. Ko. Run* 1-8, Borisat Suratkanphim, 1968, p. 230 より明かである。また, タマサート大学の学生台帳によると, 彼は1947年にタマサート大学に登録している。(Thammasat University Archives (1) Mo Tho. 23.4.3.1/1, Rai-chu phusamak khao chan parinyatri 1946-1949, p. 280)
- 42 『全民報』1947年4月5, 7, 8, 9日号
- 43 筆者が面談したサノと同世代の共産党員たちは口を揃えて, サノは法螺吹きで, また何でも知りたがって直ぐに秘密事項でも訊ねるので信頼されていなかったと語った。確かにサノが筆者にインタビューで語った人物の氏名, 経歴等を文献と照合してみると, 間違っていることが少なかった。なお, Pho. Muangchomphu (Udom Sisuwan), *Su Somoraphum Phuphan*, Bangkok, Matichon, 1987, pp. 43-44 もサノの中国での追放生活を記している。
- 44 *Prospectus Faculty of Arts and Science, Chulalongkorn University, B. E. 2480 (A. D. 1937-38)*, 1937.
- 45 ラムチアックによれば, 朱叟林はタイ人並みのタイ語を話した (Interview with Lamchiak Songkharak at Bangkok on 21 Dec. 2003.) 朱叟林の簡単な経歴は, 潮汕百科全書編輯委員会編著『潮汕百科全書』, 中国大百科全書出版社, 1994, p. 749.
- 46 余松は, 1935年6月にバンコクの名門華僑学校, 新民学校の学生として学生ストに参加した。その後の経歴は, 村嶋英治「第二次世界大戦期間の日泰同盟及泰国華僑」(『アジア太平洋討究』第7号, 2005年) pp. 54-

- 55 を見よ。
- 47 プラサートとブッタートとの仏教、社会主義等についての対話は、下記参照。Tomomi Ito, "Discussions in the Buddhist public sphere in twentieth-century Thailand: Buddhadasa Bhikkhu and his world" (a thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy of the Australian National University, 2001), pp. 224-230.
- 48 ダムリとウィロートは同様の方法で 1949 年に中央委員に任命された (Interview with Damri Ruangsutham at Bangkok on 11 Sept. 2004)
- 49 Interview with Prasoet Sapsunthon at Bangkok on 16 June 1981.
- 50 1949 年末 50 年初に成立した共産党系の青年団体 So. Yo. To. の初代委員長であるプラチュアアップは、ニコムが加わった組織を So. Yo. To. 以前に存在した共産党系の学生組織と表現した (2003 年 2 月 19 日のプラチュアアップとの筆者インタビュー)。ニコム (1925-2001) の葬式本は学生時代の活動について「ニコムは社会、政治問題に関心をもつ青年の素質を発揮した。タマサート大学の学生活動に参加し、その名を当時のタマサート大学学生間に轟かせた。」と記している。 (*Anuson nai ganphrarachathan plengsop Sastrachan Nikhom Chanthrawithun*, 2002, p. 17)
- 51 Nongyao Praphatthit, *Kao pi nai Pakking* (北京の 9 年), Phraephithaya, 1966, pp. 15-16, 31-32, を見よ。
- 52 ラムチアックは 1951 年 4 月 22-30 日北京で開催された、国際学連 (International Union of Students, IUS) 執行委員会 (欧州, アジアから 47 カ国代表参加) にタイのオブザーバーとして参加した。タイには学生連合会が存在しないので、オブザーバーの資格であった。参加者は社会主義の平和政策を支持、アメリカ帝国主義を糾弾した。彼女も米帝国主義がタイの独立を脅かしていると発言した。委員会最後の日には国際平和委員会 (ベルリン開催) の決議を支持することを決定し、また、各国の学生組織がこの決議を宣伝する運動を展開すべきことも決めた (以上は、モスクワのタイ公使館が本省にブラウダの記事を報告したもの。外相はこの報告を 1951 年 6 月 5 日付けで首相に上申した。NAT, (2) So. Ro. 0201.89/13)
- 53 Interview with Lamchiak Songkharak at Bangkok on 21 Dec. 2003.
- 54 Interview with Somkhwan Phichaikun at Bangkok on 1 April 2005.
- 55 Thammasat University Archives (1) Mo. Tho. 23.4.4/3.
- 56 戦後タイ政府が、連合国の代理と称して在タイ日本資産 (軍資産のみならず、日本企業および個人財産をも対象とした) を接收、管理、処分したことに関しては、村嶋英治「日タイ関係 1945-1952 年: 在タイ日本人及び在タイ日本資産の戦後処理を中心に」、『アジア太平洋討究』第 1 号, 2000 年, pp. 141-162. 参照
- 57 サノ・タンブンユーン (1916-1999) はタイ政府の仏歴 2479 年度 (1936/37) の国費留学生試験に合格し、チュラーロンコーン大学文理学部からイギリスのケンブリッジ大学で数学を勉強するように命じられた。1937 年 6 月にイギリス到着した。翌年 10 月 Trinity College, Cambridge に入学するも、健康状態に問題もあって成績不良、1941 年 7 月に専攻を数学から物理に変更した上、成績でもオーナーが取れず、Pass でどうにか学士号を取得した。しかし、戦時中で海路が危険であることを理由にして帰国せず、同年 8 月には在英タイ留学生会 (Samakkhi Samakhom) の会長に選出された。学業は優秀ではないが、性格がよく在英タイ学生間に人気があった。戦争中は BBC に勤務し、1947 年 4 月 14 日にタイ帰国のためイギリスを出発した。 (NAT, Ko. To. 43.10/290) サノ・タンブンユーンの葬式本 (*Anuson ganphrarachathan phlengsop Sastrachan Sanoh Tanbunyun*, 1999, p. 18) では、1947 年 4 月に世界民主青年連盟の大会出席のために、タイ青年代表に任じられたことが記されている。これは時期から見て、世界民主青年連盟主催で 1947 年 7 月-8 月にチェコの首都プラハで開催された第一回世界青年祭典 (World Youth Festival in Prague in July and August of 1947) に出席するためであろう。これはタイに帰国すると、サノは直ぐに世界大会出席のために欧州に引き返したことを意味する。
- 58 当時のタマサート大学には学歴要件を充す者は、誰でも登録することができた。授業に出る義務はなく、年 2 回行われる試験に合格し必要単位を取得さえすれば卒業できた。それ故、在学しながら就職することが一般的であった。当時は民間では高学歴者に相応しい職場はきわめて限られており、官庁は社会的名誉や安定した収入を得ることができる職場であったので高学歴者の殆どが公務員志望であった。タマサート大学に在学したまま、「文官規則法」に則って実施される競争採用試験を受験し、国家公務員に採用され就業していた。
- 59 本稿前出のようにルアムと同行したプラサートの言。同じくルアムと同行しダムリも、その中国派遣の背景を、1949 年 2 月 26 日のブリーディー派のクーデター直後の 3 月 4 日、警察が 4 元大臣を暗殺する事件が生じたので、共産党は危険を感じて中国派遣団の第一陣を急いで送り出した、と語った。(Interview with Damri Ruangsutham at Bangkok on 16 March 2005)
- 60 *Thamniap To. Mo. Tho. Ko. Run 1-8*, Borisat Suratkanphim, 1968, p. 297.
- 61 ウドム・チャローンラットのタマサート大学登録番号は 21962、生年月日は 1929 年 4 月 1 日、学歴はタマサート大学予科、タマサート大学登録日は 1948 年 7 月 8 日である (Thammasat University Archives, (1)

Mo. Tho. 23.4.4/4, "Thabian Naksuksa Mahawithayalai".

- 62 タイ大蔵省中央会計局『1995 年予算年度年次報告書』(タイ語) pp.34-35.
- 63 タイ共産党の組織で最小基本単位は小組(ヌアイ・バック, Nuai Phak)と称し, 3 名以上の成員で成立する。都市の地下活動では小組の構成員は 3~8 人程度と小規模だが, 森林の中では 100 人近い人数に増大したケースもあったという (Interview with Pa Phung at Bangkok on 5 June 2004)
- 64 ウドムらが中国に派遣されたのは 1951 年。タイ共産党はこれをマルクス・レーニン学院派遣の一期生としている。この一期生は 47 名にも上り, ウドムの外に Phin Buaoon, Thong Chaemsri, Charoen Wangam, Phayom Chulanon, Asani Phonlachan, Wirat Angkathawon らが含まれている (*Phuchatkan*, 30 March 1995)。
- 65 ラムチアックによれば, 1954 年に北京で展開されたタイ共産党内のプラサートと党主流派との論争では, ウドムはどちらにも与せず中立の立場を取った。
- 66 *Anuson nai ganphrarachthan plengsop Nai Pramual Saphawasu*, 2002, p. 3-7.
- 67 Thammasat University Archives (1) Mo. Tho. 23.3.1/4 "Raichu Nakrian triamparinya pithi 2 Run 7, 2488-2489", p. 297.
- 68 Thammasat University Archives, (1) Mo. Tho. 23.4.4/3, "Samutthabian Mahawithayalai, Thammasat Bandit, 15026-20000", p. 527.
- 69 Thammasat University Archives (1) Mo. Tho. 23.4.6.1/79 "Khanaen sop khokhian lae pakplao Naksuksa parinyatri chan pi thi 1 Tulakhom 2489"
- 70 Thammasat University Archives (1) Mo. Tho. 23.4.6.1/85 "Prakat phonkansopkhian chan parinyatri pi thi 1, kansoplai samai pracham duan Mokarakhom 2490", p. 145.
- 71 Thammasat University Archives (1) Mo. Tho. 23.4.6.1/97 "Prakat phonkansopkhian chan parinyatri pi thi 1, kansoplai samai pracham duan Mokarakhom 2491", p. 146.
- 72 Thammasat University Archives (1) Mo. Tho. 23.4.6.1/103 "Prakat phonkansopkhian chan parinyatri pi thi 1, kansoplai samai pracham duan Tulakhom 2491" p. 138
- 73 Thammasat University Archives (1) Mo. Tho. 23.4.6.1/122 "Prakat phonkansopkhian chan parinyatri pi thi 2, kansoplai samai pracham duan Mokarakhom 2493" p. 28.
- 74 Thammasat University Archives (1) Mo. Tho. 23.4.6.1/134, 139.
- 75 [In 1947—author] "Upon his return to Bangkok, Nuon Chea took another civil service exam, this time to join the Foreign Ministry. He was assigned to the Indochina Desk but was denied a professional position. Instead, he was given the same level of clerical position he had held at the Finance Ministry with the same amount of salary of 24 baht per month." "But perhaps the denial of a professional position by the Foreign Ministry which granted it to real Thais, sealed his political fate. In his mind, Nuon Chea was Thai but was not really Thai; he was not really equal, and didn't have the same rights as other Thais. This perhaps decided him on returning to Cambodia." (*Bangkok Post*, 18 April 2006)
- 76 *Nitisan phanaek krisadika* Vol. 15 no. 10 (Oct. 1942), pp. 1054-1076.